# キャリア・デザインと三つのケース

谷　光　太　郎

(一)　はじめに
(二)　キャリア・デザインの必要性
(三)　ケース・スタディ(A)（キャリア推移）
　(1)　その一
　(2)　その二
　(3)　その三
(四)　ケース・スタディ(B)（人脈）
　(1)　その一
　(2)　その二
(五)　ケース・スタディ(C)（共通のもの）
　(1)　時間活用
　(2)　文章
　(3)　書斎
　(4)　博覧強記
　(5)　外国語
　(6)　容貌
　(7)　その他

## (一) はじめに

社会科学系の学問を学んだ者は学校を卒業すると，自然科学系出身者と比べ，勉強をしない，という評を聞く。これは，ある面では当り前のことかも知れない。技術者や医者は卒業してからも自分の専門分野の勉強を続けなければ存在価値がなくなってしまう恐れが多分にある。一方，事務屋と称される組織人となった者には，さほどに学問的要素は必要でない。職場の常識に従って勤務をすれば，それでまず大丈夫だ。むしろ職場は勿論職場以外でも学術書など読んでいれば職場で浮き上がった存在になってしまうことも多い。

日本国内の一国経済だけを考えておればなんとかなり，毎年経済が発展するいわゆる右肩上りの経済で，世界の最先端をいく米国を見習っておれば大体先が読める時代で，組織内でも年功序列主義によって秩序が保たれていた時代であればそれでやってゆけた。

経験を積んだ，ベテランの中間管理者が職場の中核としてにらみを効かせている限り企業は磐石，といった時代はそれでよかった。こういう時代の人事考課では，協調性に富み，社内融和を破らない，温厚篤実，精励格勤型が高く評価された。組織が激しい競争にさらされず，安定している時代に，誰からも公平なものとして貴ばれる人事考課方法は大体このようなものになってゆく。農耕型集団の色濃い日本社会のようにメンバー間の嫉妬心が特別強い所では特にそうである。このような組織での評価基準は才能では決してなく，人格ないし徳である。

こんな人事考課の一例を日本海軍の人事考課方式に見ることができる。日本海軍では，神経質と思われる程，公正な人事行政を行おうとした。公正な人事行政とは誰も文句がいえにくい人事行政である。誰からも文句が出せない評価の一つは主観の要素の入ることの少ない学校の卒業席次の重視であり，毀誉褒貶の少ない温厚篤実な人格者，精励格勤型への評価であ

る。更につけ加えれば，抜擢人事を行わないことだ。抜擢人事は平穏な時代には必ずメンバー間の嫉視と不満をもたらす。このような日本海軍の人事考課は，平時には，長幼の秩序を尚び，嫉妬心が渦巻く日本社会では穏当な人事行政であったことは否めない。但し，実力と権謀の限りを尽くして戦う戦時では極めて問題のある人事行政であった。旧海軍関係者は次のような反省をしている。

「一般に温厚篤実を尊び，したがって，覇気あり創意工夫に富む者より，いわゆる大勢順応型を重要する傾向がなかったとはいえない」[1)]

「兵学校等を中以下の席次で卒業し，終生その能力を発揮できなかった者が多いと思われる反面，上位卒業者で，不知不識の間に安易な気分となり，積極的な努力を怠ったため，平凡無為な勤務となり顕著な功績を残さなかったものが少なくない」[2)]

「ある特定の能力・業績を示した個人を抜擢して，序列を進めた例はむしろ稀であった。たまにあっても，いわゆる事務能力のあがる人，あるいは格別に堅物で保守的な人物が選ばれ，個性が強く，直言剛直，反伝統的で独創に富む人は遠ざけされる傾向があった」[3)]

このような，①学校卒業時の成績重視主義，②温厚篤実な大勢順応型への評価と個性的人物の排除，③機械的公平主義が，実力だけの赤裸裸な戦争において破綻をきたしたのは当然ともいえた。かかる人事行政の結果，主要な地位に就いた人々は，いずれも，保守的思考傾向の温好篤実，大勢順応，精励格勤型であり[4)]，個性排除は抜擢のない機械的公平主義は，海軍をして心地よいぬるま湯とさせ，厳しい戦争に耐えれぬ人事配置をさせていった。

戦争中の一時，海軍省教育局長だった高木惣吉は次のような反省を書い

1）「日本海軍の伝統・体質」兵術同好会，平成２年，非売品　P 23
2） ibid., pp23-24
3） ibid., pp24-25
4） 太平洋戦争開戦直前の及川古志郎，戦時中の島田繁太郎の両海軍大臣はその典型と評す人が多い。

ている。

「実戦によって見出された指揮官の異常なる能力よりも，（従来方式の人事考課の集積で成立した先任順位表である）士官名簿のほうが遥かに重大な要素であって，たとえネルソンあり，ナポレオンがあったとしても，彼等の年歯では決して戦略問題に容喙する地位に就けなかったであろう」[5)]

「（従来方式の人事考課によって枢要の地位に就いていた）彼等は思索せず，読書せず，上級者となるに従って反駁する人もなく，批判をうける機会もなく，式場の御神体となり，権威の偶像となって温室の裡に保護された」[6)]

先進国米国というお手本があり，経済が年々大きく成長した時代にあっては，人徳のある管理者の下，大勢順応型の温厚篤実な従業員が精励格勤しておれば企業はまず問題がなかった。

経済や技術の世界で日本が世界の最先進国となり，お手本がなくなり，人件費が米国よりも何割も高くなっている現在，激しい国際競争下で生き延びてゆくためには，何よりも，時勢にあった企業戦略の樹立と，国際市場で競争し得る製品企画力が求められてきている。特にパソコン・ネットワークの普及や人件費の負担は，中間管理者層の能力を厳しくチェックし始めるようになった。

日本式経営の特色は，(1)終身雇傭，(2)年功序列，(3)企業内組合の三つである，といわれている。これは戦後日本社会の特質に深く基づいているので，そう簡単に崩れてしまうものではないが，厳しい国際競争の下では，特に(2)の要素は見直しが強く迫られることは必至であろう。

事務系の人々にとっても，卒業後も専門の学問への取り組みや，一般的教養の修得が自然科学系の人々に劣らず重要になる時代となっている。一般の職場では従来よりの，反知主義的経験重視，あるいは根深い学問蔑視

5）「太平洋海戦史」高木惣吉，岩波書店，1971年　p.xi
6）ibid., P.X

風潮，出る杭は打たれるといった職場雰囲気は強く残るであろうが，企業存続のためにはそういった風調は薄くなって行かざるを得ない。

職場は実務の世界である。空理空論は厳しく戒められねばならないが，過去の体験に基づく前例主義の思考プロセスと，精励格勤のみが最重要視される時代ではなくなりつつある。その原因の最大のものは，国際間の競争の激化と，人件費や産業技術の最先進国化である。お手本の不存在と人件費が世界のどこよりも高い，という中での国際間の競争は，企業人の質の変質を求めている。

従来の企業の事務屋間によく見られた反知主義的経験重視と協調・大勢順応型評価の流れは徐々にではあっても変えざるを得まい。

## (二) キャリア・デザインの必要性

企業における高学歴者のキャリアの不安定さが急激に増大してきている。

理由は，①企業内に占める高学歴者の比率増大，②人件費が世界一の水準になったこと，③国際的大競争時代の荒海に企業が乗り出さなくてはならなくなったこと，といったことが考えられる。筆者の体験でも，これを実感として体験した。筆者が大手電機メーカーに入社したのは，高度経済成長期の1963年で，以降30年間勤務した。大卒の同期入社者は約200人の大集団であった。

事業規模の急拡大で，入社後のほぼ20年間は大体全員が安定した昇進の道を歩むことができた。

入社20年目くらいから，昇進に大きな差が表われるようになった，従来ではあまり考えられなかった，後輩の上長に仕えるといったケースが頻発するようになった。同期生の陛級差が三ランク以上にもなるケースも珍しくなくなった。事業の急拡大が望めなくなり，ポストの数は増えないから，「せめて課長，部長に」という夢が叶えぬ者が急激に増えていった。一流

大学に合格できれば，一流企業での安定したキャリアというコースは音をたてて崩れていくのを実感した。一流大学を卒業しても，高校卒や中学卒の者より昇進が遅れるケースも珍らしくなくなった。学歴と職務遂行能力とは別なのだから当然といえば当然なのだが，受験戦争で受験雑誌や教師から学校格差が人間格差の如く思い込まされて育ってきた者にとっては辛いだろうと思われるケースが周辺で日常的に見られるようになった。人事評価は高度経済成長時代は減点主義で，ミスを犯さぬ事が第一であった。温厚篤実，大勢順応，権威への従順，精励格勤型が貴ばれ，個性派，自己主張派，直言剛直型は嫌われてきた。このような体制下で「会社の命ずるまま，真面目に過しておれば会社も悪いようにすまい」と考えてきた人々が，弊履の如く追われてゆくケースを多く見るようになった。

これらのことは当然といえば当然だ。会社から給料相当の仕事をしていないと見なされれば，切られるのが当然。会社に甘える態度があったり，自己の能力向上を怠ったりしていた本人に責がある。

大体35歳くらいまでに会社は本人の能力を見極め，それ以降はぐんぐん差をつけ，45歳くらいから，大多数の高学歴者を不要の人物と極印を押すケースが普通となったのが，最近の10年間だったように思う。50歳を超えると，会社にとって大体8割から9割の者は不要の人材となる。50歳を過ぎて不要人物を宣言されて周章狼狽せぬためには，40歳前後で，自分のキャリアを再点検することが必要な時代となった。高学歴化の進展，団塊の世代の管理職の整理，バブル時代の大量採用者の管理職世代化への対処，といったことを考えると，企業にとっても，従業員にとっても，自分の生涯のキャリアを真剣に考えねばならぬ時代となってきている。

①キャリア・デブロプメント，②キャリア・ビジョン，③キャリア・デザイン，といった言葉がよく目につくようになったのもここ10年間くらいのことだ。筆者の知るところでは①が最も古く，米軍のキャリア・オフィサー（正規将校）のガイドに古くからこれが記載されていた。標準的なキャリア・パターンの下に詳細な職務，昇進，教育，研修のプログラムが作ら

れているのに驚いたことがある。[7] 筆者は入社後10年間は人事関係の仕事をしていた。これからは幹部の研修コースを作る必要があると考え，参考となりそうな資料を集めていた時に見つけたのが米軍将校用のこのガイドだった。

近時，学会でこの方面の研究をされている方に筆者の知る範囲では神戸大学経営学部の金井壽宏教授や産能大学経営情報学部宮城まり子助教授といった人々がいる。[8]

また，最近得た資料では，キャリア・コンサルタントをされている白根陸夫氏の「キャリア・ビジョン－大転換期の意識革命－」河出書房新社，1996年，が大変興味深かった。

1992年に日経産業消費研究所が実施した日本人の仕事意識調査によると，日本のビジネスマンは四つのタイプに分けられるという。(1995年3月29日，日本経済新聞)

①　ブルーカラー型

給料，住宅施設，休暇などを重視，自己実現の欲求や上昇志向は低い。

②　伝統的日本型

組織への依存度が高く，組織内での昇進や権限の掌握を重視する。仕事第一主義で私生活より仕事を優先する。このタイプは減少傾向にある。

③　新人類型

上昇志向があり，個人主義的傾向が強い。消費生活に重点を置く。仕事は遊びのための資金かせぎと割り切り，責任は少い方がよいと考える。この型の多くは年をとると，ブルーカラー型に移行する。

④　ゴールドカラー型

7）例えば「The Naval Officer's Guide」 8 th edition by Arthur A. Ageton, with William P. Mack, US Naval Inst., 1970, PP. 378-406「The Officer's Guide」updated by Lawrence P. Crocker, Stackpole Books, 36th edition, PP. 199-230

8）1996年11月30日　神戸大学経営学部で「キャリアをデザインする－日本の産業社会におけるキャリアのあり方」をテーマとするワーク・ショップがあり、金井壽宏教授や宮城まり子助教授の講演があった。

自己実現至上主義者。仕事の内容そのものに意義を見出し，精神的充足を求める。成果に対する正当な評価を求める。伝統的な意味での成功や出世にこだわらない。生活全般にわたって意欲的である。

「キャリア戦略研究所」の坂野尚子氏は，四つのタイプに分類している。(1995年4月21日付「労政時報」)

① 成り行き型タイプ

② キャリア分散型タイプ

③ 夢追い型タイプ

④ キャリア戦略型タイプ

キャリア戦略型タイプの特長は，キャリア・ビジョンがはっきりしていて，戦略も明確，かつ意思強固。

白根陸夫氏は今後ビジネスマンが目指すべきは「ゴールドタイプ型」及び「戦略型タイプ」であるとし，それができない原因として次の三つをあげている。[9)]

(i) 何をやりたいかが分からない。(キャリア・ビジョンがない)

(ii) やりたいことをどうすればいいか分からない。(目標到達手段が不明確)

(iii) 本気で目標に向かっていく意志がない。(目標到達への意欲が希薄)

人の人世観は多種多様で，人間のタイプが上記の四つのタイプにまとめ切れるものではないことは勿論だ。世の中を渡ってゆく方法は各人各様であってよい。ただ，一般に上昇志向の強い人，自己実現意識の強い人は少しのつまづきで挫折感に陥る人が多い。前述の(i)，(ii)，(iii)に関して自分の考えを明確にし，日頃よりこれを反芻(はんすう)している人は，たとえつまづきがあっても，立ち直りが早く，深い挫折感に苛まれることが少ない。

本論文はキャリア・デブロプメント，キャリア・ビジョン，キャリア・

---

9）「キャリア・ビジョン－大転換期の意識革命－」白根陸夫，河出書房新社．1996年 PP.43-46

デザインに関して先達の研究を紹介することではない。

企業従業員として前述のブルーカラー型でも，成り行き型でもなく，伝統的日本型でありながら，ゴールドカラー型，ないしキャリア戦略型タイプの混ざりあったようなタイプの人々の人生の生き方には平凡な企業人にも一つの参考になるのではないかと考え，著名人三人のキャリア志向や特色などについて記述するのが本論文の目的である。これらの人々の生き方はいずれ企業人や組織人となる学生諸君にも必ず有益なものとなると思う。筆者自身の体験では，学校時代に〇〇理論や，西洋の学者の著作を勉学することよりも，自分の将来のキャリアへの思索を少しでもしておいたらよかったという気持が強い。

筆者の人事課員時代にはキャリア・デベロプロントといったことはあまり口にされていなかった。そんな時，キャリア・デベロプロメントないし，キャリア・ビジョンといったことで興味を持ち，且つ参考になったのは，森鴎外 (1862-1922), 柳田国男 (1875-1962), 南方熊楠 (1867-1941) といった人々の生涯だった。これらの人々のキャリアは一般の企業人にも多くの示唆を含んでいると思った。

筆者が魅せられた理由はどこにあったのだろうか。

その理由は，自然科学以外の分野で彼等が大学等の専門研究機関に所属していないにも拘らず，大きな知的業績を残したことにあった。企業人は日々実務に励んでいる人々だ。

日常の実務だけでは心が満たされず，何か知的なことで精神を充実させたいと思っている人は多い。前述したように企業内でも，個性と見識が求められる時代となりつつある。そういう人々にとって，森，柳田，南方の3人は大いに心を魅かれる人物に違いない。3人はほぼ同時代人であり，後述するように人間的関連もある。3人は常人に比べて冠絶する知的好奇心を持ち，膨大な著作と書簡を残し，いずれも浩瀚な全集がある。3人の知的業績の量に関しては一致しているが，キャリアと性格には大きな相異があり，これが我々の関心の短調化を防いでくれる。森のキャリアは官界

(陸軍医務官僚，陸軍退役後は宮内官僚）で終始した。柳田は官界（農商務省，法制局，貴族院書記官長）19年，民間企業（朝日新聞の客員，編集委員）12年間，その後はどこにも属さず一民間人として活躍した。南方は生涯組織に属さなかった。

森は実直な官吏型である。柳田は常識に富む能吏型ではあるが，官界という狭い枠の中には入り切れない，個性と剛直さがあった。南方は一言でいえば不羈奔放。

森は同期生の上役の9年間に渉る排擠に耐え，権門に取り入れることも辞せず，組織のトップの座への昇進に執念を燃やした。柳田は名利に恬淡で，上役に明らさまな反抗的態度をとって辞表をたたきつけるといった態度すら取った。南方はそもそも組織で生きられる人間ではない。三者をシナ思想の儒，老，荘で区別するとすれば，森は儒，柳田は儒と老，南方は荘とでも区別できるのではあるまいか。

南方が最近とみに人気が高いのは，何事にも規制されぬ奔放さに魅力を感じる人が多くなっているためと思う。

官吏や老成した人々，あるいは君子型を目標とする人々に森崇拝者が多いのも分るような気がする。森と南方の中間が柳田といってもよいのではなかろうか。

三者については浩瀚な全集が公刊されており，汗牛充棟の研究書がある。人気が高いだけに，研究者により，日記，手記，書簡等まで，断簡零墨に到るまで博捜され，微に入り細に渉った分析がされている。私は三者の研究専門家ではない。これら研究者と研究の細を競うつもりは毛頭ない。ただ，森の場合は往々にして，崇拝者によって神格化され，研究者が当時の軍の事情に暗いための誤解といった点を感じることもある。南方に至っては話を面白くさせるための奇人化が甚しい。筆者は経営学は，経済学，社会学，心理学，法律学，工学といった学問の成果を総合させ，常識をより高次に昂めた学問だと思っている。

本論文の目的はこの三者のキャリアを分析することにより，自分のキャ

リアの将来を真剣に考えている人々が，三人についてより深い関心を持ち，自分の参考にするための呼び水となることである。

早くて35歳頃，遅くても50歳前には，自分のキャリアの見直しを考えざるを得ない大多数の企業人——あるいはそういう社会に入っていく学生諸君——が参考にできる例の一つがこの三人の生き方である。

多忙な企業人，あるいは時間的余裕はあっても資料収集のための経済的余裕のない学生諸君にとって，三人の生涯は詳しく研究され，著作や書簡が多く，これらの資料が容易に入手，閲覧しやすい。しかもこの三人は人生の師表ともなり得る人々だ。キャリア・デブロプメントを考える場合，容易にその人物像に接し得ると同時に多くの示唆を受けることができる人々がこの三人である。

## (三) ケース・スタディ(A)（キャリア推移）

### (1) その一

森鴎外は津和野藩４万３千石亀井氏に代々仕えた医官の家柄の出身である。祖父，父とも入り婿で，鴎外は森家で久々の嫡男であった。父は「世故に疎い名利の念の薄い人」，母は「(夫に) 傍から助けて，柔に勤めもし，強く諫めもして，夫の過失のないやうに」するタイプの女性で，家付娘として森家の経済，育児の文字どおりの柱であった[10)]。

津和野藩は北に親藩（徳川一族）の浜田藩松平家，東に外様大名の芸州浅野家，西に外様の雄毛利家に挟まれ，山間の小藩としてこれら大藩に気を使わなければ生きていけなかった。幕末の第二次長州戦争では中立を装い，長州に通じた。津和野から長州との国境（野坂峠）まではわずか一里。言葉も長州弁だ[11)]。

亀井氏の前の領主坂崎出羽守守政の虚栄心からの城改築のためか，四万

10)「鴎外選集第５巻」岩波書店，1979年　P.283

石の小藩の城とも見えぬ規模の典型的山城は，現代でも数多くの石垣が残っており，ここから津和野の町を眼下に臨むことができる。

山陽本線小郡駅から山口線が山口にまで延びたのは大正2年。山口から津和野へと繋がったのは同11年である。それまでは，徳山から人力車で険しい山道を行くしかなかった。

10歳の年，父とともに上京し，親戚で主家筋の西周宅に寄寓した，以降，津和野へは一度も帰郷したことがない。西は榎本武揚，赤松則良，津田直道，林紀（研海）らとともに幕末のオランダ留学組である。

榎本，赤松は後に海軍中将となり榎本は子爵，赤松は男爵の爵位を賜っている。

19歳で東大医学部卒業。陸軍軍医となる。22歳から26歳までドイツ留学。

帰国の年ドイツ留学時代同棲していたドイツ人少女エリスが森の後を追って来日。

翌年，西周の媒酌で海軍中将赤松則良の長女登志子と結婚。東大出，洋行帰りの俊秀とはいえ，50石取りの貧乏藩医の息子がきらびやかな閨閥を誇る華族と縁組をした。ちなみに登志子の母貞は蘭方医林洞海の娘。貞の兄紀(つな)は前述のようにオランダ留学組で明治12年から明治15年まで陸軍軍医本部長（後の医務局長）。貞の姉多津は子爵海軍中将榎本武揚の妻。登志子の弟喬二の妻は男爵大島圭介の次女。

この結婚は一年で破綻する。登志子は何かといえば「榎本の伯母」を口にする。はたの者には榎本子爵家をひけらかすように聞こえる。貧乏な藩医の妻として機を織って家計を助けてきた鴎外の母峰子にとって，華族の生活を持ち込んだような登志子の家計ぶりには肝を冷やした。[12]

峰子は登志子の不器量をはっきりといっている。登志子がもっと美人だったら息子も嫌わなかっただろうといった。[13]

峰子は，鴎外と登志子との間にできた於菟に登志子を「何しろ鼻が低く

11）「両像・森鴎外」松本清張，文芸春秋社，1994年，P.10
12）ibid., P.49, P.57

て笑ふと歯ぐきがまる見えなんだから」「お登志さんも少しも悪い人ではないのだが，もっと器量がよかったら林（太郎）もきらわなかったらう」といった。[14)]

鴎外も登志子を，「眉目妍好（けんこう）」ならず，と書いた。[15)]あの巨人鴎外がと不思議に見えるくらい，鴎外は俗にいう「面食（めんく）い」であった。

万事順調に見えた鴎外の陸軍軍医界での経歴が一つの転期を迎える。同期生の小池正直が軍医総監（陸軍中将相当官）・医務局長となり近衛師団軍医部長兼医学校長の鴎外は第12師団軍医部長に補される。いわゆる小倉左遷である。この人事を当時の陸軍省医務局の人事の状況からすれば左遷とはいえないとする考え（例えば「鴎外の『小倉転勤』再考」，浅井卓夫，「鴎外」第26号，昭和55年１月）もあるが，肝心の鴎外ははっきりと左遷を考え，陸軍を辞めることも考えた。鴎外にとってこの人事異動は耐え難い屈辱であった。陸軍を辞めたいという鴎外を切諌したのが同期生の賀古鶴所である。鴎外が怒って辞めれば小池局長とその背後にいる陸軍軍医界の大ボス石黒忠悳（ただのり）元局長の思う壺になる。ここは我慢して小倉へ行けと諌めた。[16)] 賀古は浜松の蘭方医の息。鴎外より７歳上。

小池と鴎外との関係について，鴎外の弟潤三郎は次のように書いている。

「小池氏は露骨に言へば冷酷，剛愎で，人を容るる雅量に乏しく部下は畏服するが心服はしない。兄（鴎外）は好憎の差は烈しいが，一たび信頼すれば之に任かせてうるさい干渉をしないから，部下は心服してその仕事を楽しむといふ有様であった。この部下の心服が小池氏の気に入らないのである」[17)]

人間関係の微妙さは古今東西を問わない。部下の評判の高さや，人望が気に入らぬ上役は昔の今も数多くて要注意である。

13）ibid., P.51
14）ibid., P.34
15）明治33年２月４日付森鴎外日記
16）「鴎外、屈辱に死す」大谷晃一，人文書院，1983年　P.68
17）「鴎外　森林太郎」森潤三郎，森北書店，1943年　P.100

仲よく陸軍軍医となった同期生も，地位が上るにつれライバル同士となって互に張り合うようになる。互に長所，短所も知り尽している。小池は羽前鶴岡の産。鴎外よりも8歳上。小池，森，賀古は同年に東大医学部を卒業し，同年に陸軍軍医となった。当時の陸軍軍医本部次長（本部長は林紀）石黒忠悳に漢文の森の推薦状を書き，強く採用を奨めたのは小池であった。陸軍での初級から中級軍医時代，両者の仲は良好で連名で，意見書一編，研究書二編，単行本一冊を書いている。[18]

両者は互に雁行とて陸軍軍医の地位を昇ってゆくうちに両者の間が険悪化していった。

小池は軍医は軍務に一意専念して励むべきだと考える剛愎の人である。鴎外が文筆界で活躍するの心良く思っていなかった。小池の背後にいた軍医界の大ボス石黒忠悳も同様で，エリス事件や，赤松登志子との結婚破綻を然るべき地位に立つ軍医として問題と考えたのも自然であろう。小池が人望のある鴎外を面白くなく思ったことも想像できる。小池は医務局長に就任後「医務局長としての執務方針」を書いた。

「一種ノ技術官タル軍医ノ拙劣ハ軍隊ノ不利ヲ招クノミナラズ，文明国トノ関係日ニ密接ヲ加エ，自ラ国光ヲ損フノ憂アルヲ以テ，素養ナキ老朽者ハ勿論，勤務ヲ惰リ私営ニ汲々トシテ前途見込ナキ者は，此際補充ニ差支ナキ限り，サッサ――ト其ノ願ヲ容レ休職列ニ入レ，旁以テ予備ノ力ヲ強大ニセラレタキ事」(「男爵，小池正直伝」)[19]

現代の企業リストラにも通じる正論であり，剛愎の小池はこれを断行した。

陸軍軍医同期で鴎外の生涯の莫逆の友であった賀古鶴所は明治29年に予備役となり，神田小川町に耳鼻咽喉科の賀古病院を開業した。賀古も現役中自宅で患者を診ていた。[20]

これが賀古の退役を早めた。賀古は小池に反感を抱いており，終始鴎外

18)「森鴎外私論」前出，PP.289-292
19) ibid., P.304

に同情的であった。

仲の良かった同期生が年を経るにつれ，組織の階段を昇って行くうちにライバル関係となり，疎遠となる。双方の意思不疎通や，取り巻きの言動で互に疑心暗鬼となって反発しあい，甚しい場合は敵対関係に陥る。こんなケースは，年功序列と終身雇傭制度の色濃い日本企業や官庁ではごくありふれた現象である。関心のある人には「異色官僚」（佐橋滋，ダイヤモンド社，昭和42年）をお奨めする。通産省役人だった佐橋滋と同期の今井善衛との間の確執が，佐橋本人によって書かれている。企業や官庁で過ごした人ならば容易に理解できることである。

「左遷」云々については，当時の陸軍軍医人事行政上決して左遷ではないとする考え，——前述の浅井説や鴎外の部下たりし山田弘倫の説（「軍医森鴎外」）もある。ただ，「左遷」という問題は，きわめてはっきりしたケースを除いて，本人がどう感じたか，ということが大きな要素だ。閥のボスの異動といった周囲の取り巻きの利害がからんでいるケースを除いて，人は，他人の人事には興味本位くらいしか関心を持っていない。

日常くり広げられる人事異動の悲喜劇は本人の一人角力が大部分だ。問題は，鴎外がどう感じ，どう反応したかである。

鴎外ははっきりと「左遷」と思った。怒って一時は陸軍を辞めることを考えた。親友賀古の諌めによって陸軍に留まった。それまでの鴎外は上昇志向のおもむくまま，鞭で打たれるように孜孜（しし）として軍務に精励して軍医としてのピラミッドを登り続ける生活をしてきた。この小倉「左遷」によって鴎外は今までの自分のキャリアを振り返らざるを得なかった。自分の思い通りにいかぬことがあることを悟った。この地で，面喰いの鴎外は美人で評判の荒木しげと再婚した。しげも再婚である。

企業や官庁に職を奉じた人々は程度の差はあれこのような経験を一度や二度は味わう。

20)「鴎外、屈辱に死す」前出，P.40，P.69

こんな時にどう対処するか。鴎外の例は大いに参考になるのではあるまいか。

### ⑵　その二

柳田国男の曾祖父，父ともに学問好きな播州片の田舎のはやらない医者であった。祖父は入婿。些細なわがままが養父を怒らせ，家を逐われた。父賢次は姫路や伯州赤崎に招かれて学を講じたこともある。

繊細な神経の持主だった。

明治維新時，神経衰弱をわずらい座敷牢に入れられていたこともある。[21)]

柳田は明治33年，東京帝大法科大学政治学科を卒業し，恩師岡野敬次郎の推挙で農商務省に入省。農務局農政課配属となった。岡野は農商務省の参事官も兼務しており，当時の農商務省は，産業組合や農会法といった法律が相次いで公布されていたため，高等文官を必要としていた。[22)]

翌年，旧信州飯田藩士で大審院判事柳田直平と琴の養嗣子となった。柳田家へ入籍三年後，直平の四女と孝結婚。孝の長姉順は植物学者矢田部良吉博士に，次姉貞は陸軍中将（陸軍大臣も経歴）木越安綱に嫁した。三姉操は若くして病死。

農商務省に入った理由を柳田は次のように書いている。

「大学はせっかく法科へ入ったが，何をする気もなくなり，林学でもやって山に入ろうかなどとロマンチックなことを胸に描くようになった。しかし林学はそのころいちばん難しい実際科学で，大変数学の力が必要であった。私は数学の素養が十分でないので，農学をやることにした。……そこへ松崎蔵之助という先生がヨーロッパから帰り，農政学ということを伝え，東京大学で講義をしておられた。……私も農村の問題を研究して見ようかということになり……」[23)]

なお，柳田の養父直平は飯田藩士安東三嘉治の次男として生れ柳田家へ

---

21）「日本人の自伝⒀」平凡社，1981年，P.82
22）「柳田国男伝」後藤総一郎監修，三一書房，1989年　P.216

入婿となった。実弟安東貞美は後の台湾総督陸軍大将。

農商務省勤務は二年間と短かった。柳田を農商務省に推薦した恩師で上司でもあった岡野敬次郎が法制局参事官（第一部長兼任）に移り，柳田を引き抜いたからだ。当時の法制局は柳田に居心地のよい役所であった。柳田は次のように回想している。

「我々の居た頃までは，法制局は一種の研究所，乃至は学校のやうな性質を反面具へて居た。……懸案といふものが少なく，暫く閑散の日の続くことは稀ではなかった。用の無い時には我々は読書をした。もしくは調査と称して数旬の旅行をした。……或は特に専門の研究者を聘して，談話を聴くことなども多かったが，何れも気の置けない間柄であった故に，後は雑談となって茶を啜り笑ひ楽しみ，たまたま来合せた外部の人々に，斯んな気楽な所なのか，と言わせたことも二度や三度ではなかった」[24)]

柳田は自分も含め弟達二人の性格を「皆凝り性と，人のやらないことをやってみようとする野心と，負けん気というような性癖をもっていた」と書いている。[25)]

柳田は農商務省に入った頃から職務以外でも何か別の打ち込めるものを持ちたい，という考えを持っていた。尊敬していた鴎外の生活からの影響もあったと思われる。

「ただ，悪い癖がついてしまって，もう一つくらい何か余暇に出来るだろうという気持があったんです。道楽としてというか，副業として何か出来るだろうという気持を持ったわけです。それもアヴァンチュールといえばアヴァンチュールだが，何か他の者とは違うものをもっていることを示そうというきざな気持もあったんだろうと思います」[26)]

当時，内閣直属の法制局，会計局，統計局と内閣書記官室記録課は宮城

23) 「日本人の自伝⒀」前出，P.275
24) 「柳田国男伝」前出，P.317
25) 「日本人の自伝⒀」前出，P316
26) 「柳田国男伝」前出，P.306

内桔梗門にある庁舎にあった。法制局の先輩参事官江木翼が記録課長を兼務するようになると，柳田はよく内閣文庫の読書室に行き読書に耽っていた。内閣文庫は記録課の管理下にあったからだ。

法制局では13年間を過した。その間の9年は恩師の岡野敬次郎が法制局長官だった。

法制局に移って3年後には官界の大権力者山県に知られることになる。柳田の次兄井上通泰は新聞「日本」に「城南荘歌話」を連載し好評を得た。これを愛読した山県は明治38年12月，山県の忠実な子分の道家斉を使者に会見を申し込み，これがきっかけとなって井上と山県との間の緊密なつながりとなった。道家は当時法制局の筆頭参事官。柳田は最末席の参事官であった。道家の下僚であり，井上の実弟である柳田の名を山県は注目した。

柳田は兄井上通泰と常盤会のことや，山県有朋とのことについて，次のように書いている。

「常盤会は歌だけの会ですから，それが政治に関係することはなかったでしょう。しかし，その会で山県と親しくなって，なにかの折に，政治的な相談にあずかることはあったのではないでしょうか。常盤会の一人である私の兄，井上通泰は政治的な興味を持った人でしたから，私が法制局の参事官のとき，自分の計画していることを兄に話しておくと，それが山県に伝って，上の方から自分の思ったとおりに動いてゆくんですね。そのため，上官から自分を抜かされて，勝手なことをされると，ひどく怨まれたことがあります。ことはまずいと気がついて，それからは兄には，自分に関する政治的なことは話さないことに決めました」[27]

明治43年6月，前任者江木の推挙で内閣記録課長も兼任し，大正2年10月には法制局で最古参の専任参事官になった。

大正3年4月13日，第四代貴族院書記官長。

内閣書記官長は顕職であるが，日々に行政能力を要求されるといったポ

---

27) ibid., P.323

ストではない。

多分に名誉職的なポストである。

ちなみに，法制局での最古参事官から他のポストに転任した柳田より前の人々の直後のポストを明治35年以降見てみると，知事２名，内務省警保局長１，農商務省水産局長１，台湾総督府財務局長２，拓務省書記官１，行政裁判所判定官１，鉄道院理事１，である。[28]

柳田自身，大正３年４月16日付南方熊楠宛書信で次のように書いている。

「政界多事，耳目刺衝多く，静かに学問上の御話を申し上ぐべき余裕乏しく候。近々閑職に就き，半日は政道の書を詠み，半日は『郷土研究』のための学問をなし，今後６，７年を雌伏をつづけ候覚悟に候」[29]

官僚にはあまり関係のない民俗研究に没頭したり，内閣文庫の書籍の読書に耽ったりする法制局参事官の柳田は，役人としての変り者と見なされるようになったのかも知れない。但し，山県の力は絶大であって，柳田は山県系と目されている。山県は官僚系の貴族院議員（貴族院議員は，皇族，華族，勅選，多額納税の議員から構成される）を通して貴族院での勢力を貯えてきていた。

柳田は貴族院書記官長の職に有意義を見出すことができなかった。このため，職務に冷淡であっただろうことは多くの人が指摘する。[30]

また，議長の徳川家達とは反りが合わなかった。若くして，徳川慶喜より徳川宗家を第一六代として継ぎ，明治36年より昭和５年まで実に27年間に渉って貴族院議長であった徳川からみれば，書記官長など，自分の家令ぐらいにしか考えなかった。それに柳田は反発した。徳川議長の了承を得ないで長期旅行をすることが重なり，徳川の不興を買った。

大正７年10月２日の日記に次のようなのがある。

「河井君（河井弥八書記官，柳田の後任の書記官長となる）来。明後日

28) ibid., P.349
29)「柳田国男南方熊楠往復書簡集」平凡社，1976年　P.359
30)「柳田国男伝」前出，P.350

の首相（原敬）招宴のこと相談。議長の機嫌を今少し考へるやうにといふ話。此事夜ねてから再考へる。永々と生きてはたらくつもりにて無理不自然なる言行をするも考へものである。又よき頃にて静かな生活もせねばならず，所謂配所の月を見ばやの考は自分にも既に起ってをる也」[31]

後には次のように書いている。「貴族院書記官長でありながら，十分な了解もとらないで，長い大陸旅行（広東，上海，漢口など）をしたことが非常に私の人望を害してしまった。そしてだんだん役人生活を続けられない空気が濃くなって来た。その上その翌年にも私は同じやうなことをしてしまった」[32]

徳川議長と柳田の不和に関して柳田の三女三千は，「父は上司である貴族院議長に対して，不満を持ちはじめた。直情径行な父が，何ごとも思ったまま口にすることが，殿様であった議長のお気に入らなかったことは想像できる。………しかし人に強制されることを好まぬ，癇癖の強い父は自分の思いのままにふるまった。しだいにその職に居づらくなったのだと思う」[33] 晩年，柳田はこの件について，次のようにいっている。

「直接の原因と言ってもよいことは，議長の徳川さんと喧嘩したことだね。私を博物館長に転任さすといふことが，事前に洩れて新聞に出てしまった。……そこで徳川さんに長い手紙を送って，書記官長と三太夫（華族の家令）の差別を教へてあげるといふ手紙を出したのだよ。間に原敬など入り，それでは役人がつとまらないといふので，つとまらないならばやめますといってやめました」[34]

原敬日記第八巻（乾元社1950年）に次のように記述がある。[35]

「徳川家達来訪。来る14日には北京に出立すると暇乞旁内話に貴族院書

31) ibid., P.365
32) 「日本人の自伝(13)」，前出，P.389
33) 「父との散歩」堀三千，人文書院，1980年，P.10
34) 「柳田国男伝」前出，P.366
35) 以下の原敬の日記の部分はいずれも「柳田国男（日本文学研究資料叢書）」有精堂 1976年，P.216

記官長には甚だ困却すると彼の反抗的行為を物語り相当の配慮を望むと云ふに付，余は其事情を聞取り何とか考慮すべき旨を告げたり。本件徳川より内話を聞きたる事是迄数回にて如何にも両間の不和甚だしく近頃は直接会談する事すら書記官長避くる由なれば何とか処置を要する事と思う」(大正８年10月10日)

「徳川貴族院議長と柳田同書記官長の間に紛糾あり。南文部次官が徳川頼倫同達孝より依頼せされて京都に行き西園寺にも援助を求めたり。西園寺も徳川一族も余に解決を懇嘱すべしとの事なりと来談あり。又徳川の旧臣岡野行政裁判所長官も来談あり。余は単純の事と思い居たるに随分込入りたる事にて迷惑の至りなれども徳川一族も気の毒に付，何とかなさざるべからずと思う。併し妙案あるや否やを知らず」(大正８年11月20日)

「貴族院書記官長柳田国男は兼て徳川議長と不和にて，其間には徳川の私行に関し種々の事情も之ありて柳田は頑として反抗の由にて，徳川の旧臣岡野敬次郎等も心配し又徳川頼倫，同達孝（共に兄弟）より切なる依頼もあり，横田法制局長官をして尽力せしめ，其結果去る21日柳田は余に辞表を申出，次で辞表を出し，後任は同院書記官河井弥八を推挙せしに因り本日河井を招き其後任たらん事を申通し承諾に付，本日更送を決行したり」(大正８年12月23日)

筆者も企業時代多くの上司と部下の確執を見てきた。更送などの場合は上司と部下の不和が本社の常務などの耳に入り，関係者がこの最終責任者の常務に断を依頼することが多い。原敬の日記を見ると，官界も同じとの感を受ける。

柳田は貴族院議員書記官長時代，議長の徳川家達と衝突して官界を去った。この時，徳川議長は柳田を宮内省図書頭ないし帝室博物館長へ転出する話を進めていた。

この動きを知って憤激した柳田は直ちに辞表を提出した。そのポストには尊敬する鴎外がいた。自分がそこに動けば鴎外はそのポストを失う。

柳田の三女堀三千は次のように書いている。

「大正8年12月，父は官職を退いた。何の職につく当てもなかった。私はある時父がつぶやくように言った次の言葉を思い出す。『森さんが望んでおられた職を私がとるわけには行かなかったよ』。父をどこかへ転職させようという話は，必然的に起ったと思う。帝室博物館長へという噂もあった。年譜を見ると，森鴎外氏は，帝室博物館長から帝国美術院長へ転じておられる。その時期は大正8年9月。この噂も事実無根ではなかったようである。父は終生森鴎外氏を尊敬していた。（森鴎外を）井上の兄（井上通泰）の友人として若い頃から傾倒していたということを聞いている」[36)]

鴎外は陸軍に入れば洋行でき，陸軍軍医の世界で栄達できると考え陸軍に入った。

柳田は恩師に奨められて何となく農商務省に入った。そうしてすぐに法制局に移った。

実務と関係のない民俗研究に没頭したり，内閣文庫の本を読み耽ったりした。

貴族院書記官長になってからも，自分の好きなことをするため上司の貴族院議長の許可もなく長期旅行を繰り返した。上司と喧嘩をして辞表を叩きつける。

唯々軍務に精励し（帰宅後に好きな文筆に筆を染めるが），屈辱を受けても我慢し，軍医としてのキャリアを全うした鴎外と柳田は大いに異なる所があった。

### (3)　その三

南方については，森，柳田と同様，汗牛充棟ともいうべき研究書，解説書がある。詳しくはこれらの文献を参考にしてもらい，ここではごく簡単にその経歴を書く。

南方は慶応3年4月，和歌山城下の金物商南方弥兵衛の次男として生れ

36)「父との散歩」前出，P.14

た。父は商才に富み，後には金融業を営んで，県下屈指の富豪となった。

和歌山中学を経て，大学予備門に進んだ。明治19年の春退学し，その年の暮に渡米した。

商業学校や農学校に入学するが，すぐに退学，自学自修の日々を送る。6年近くの米国滞在の後，サーカス団に入って数ケ月西インド諸島を巡った。その後ロンドンに移る。渡英3年後に大英博物館の参考人となり，ここで3年8ケ月間在籍した。

このロンドン時代から，一流の週刊科学雑誌「ネーチャー（Nature）」や，論考・随筆・質疑・応答などを載せる週刊「ノーツ・アンド・クイリーズ（Notes and Queries）」に寄稿を始める。南方は帰国後も併せて，前者に50回，後者には320回に渉って投稿し，掲載されている。いずれも論考，随筆，質疑応答の類である。[37)]

明治33年，14年間にわたる外国生活を終え帰国。和歌山市の弟常楠宅に寄遇するが弟の家庭と和せず，南紀白浜，田辺と移り，田辺で定住することとなる。この地で，近くの社司の女松枝と結婚，一男一女の父となる。

南方のキャリアの特色は自学自習，気の赴くままの生活を生涯貫いたことだ。組織といったものに属したことはなく，生活のための費用を稼いだことも一度もない。父は和歌山県日高郡の寒村の庄屋の二男。寡言篤行の人で商才があった。南方によれば「西南の役ごろ非常にもうけ，和歌山のみならず関西にての富豪となれり。もとは金物屋なりしが，明治11年ごろより米屋も兼ね，後には無営業にて金貸しのみ事とせり」[38)]

兄弟としては兄一人と弟二人があった。

父は老境に入り，次のような考えで財産を子供達に分ちた。

「（長男）弥兵衛は好色淫佚放恣驕縦（いんいつほうしきようじゆう）なるものなれば，われ死して五年内に破産すべし。二男熊楠は学問好きなれば学問で世を過すべし。ただし金銭に無頓着なるものなれば一生富む能わじ。三男常楠は謹厚温柔な人

37)「南方熊楠外伝」笠井清，吉川弘文館，1986年　PP.3-4
38)「日本人の自伝⒀」前出，P.5

物なればこれこそわが後を継ぐべしもの」[39]

父の財産分配は長男に半分。二割を自分と二男熊楠，三男常楠，四男楠次郎，娘（熊楠の姉）とにそれぞれ分け，自分の取分と三男常楠の取分とで酒造業を始めた。[40]

父の財産によって，父の死後は次弟常楠の経済的援助によって好きな学問に打ち込んで一生を終えた。南方は大学予備門を中退して明治19年私費で米国留学をした。洋行資金は八千円と伝えられている。[41]当時としては驚くべき巨額の金額だった。

ちなみに鴎外は3年前の明治16年にドイツへ留学しているが，もちろん，陸軍軍医としての国費留学であった。

父の資産を使っての学問は，後に彼が書いている，英国のスペンサーやダーウィンの学問と共通するものがある。南方がスペンサーやダーウィンの生涯を自分の理想としていたことは充分想像し得ることだ。

「英人は父が職業を勉めた結果，大富人となり，その子は父の余光で何の職業も勉めずに楽に暮らし得る身なるに，なお余事に目をふらずに学問をもっぱらに励むるもの多し。いわゆる amateur 素人学問ながら，わが国でいわゆる素人浄瑠璃，素人角力と事かわり，ただその学問を糊口の方法とせぬというまでにて，実は玄人専門の学者を圧するもの多し。スペンセル，クロール，ダーウィン，いずれもこの素人学問にて千万の玄人に超絶せるものなり」[42]

なお，自学自習志向は南方の細井平洲に関する記述に次のように表わしている。

「尾張の細井平洲は四方に遊学せしが，法螺だらけの未熟な教師に就いたところが，さしたる益なしと悟って，多く書籍を買い馬に負わせて帰り，

---

39)「日本人の自伝⒀」前出，P.9
40) ibid., P.9
41)「巨人伝」津本陽，文芸春秋社，1989年，P.72
42)「日本人の自伝⒀」前出，P.23
43) ibid., P.24

それで自修してついに大儒となれりと申す」[43]

南方の性癖ないし興味の関心は既に幼少の頃より現われていた。自学自習の態度と想像を超えるような書字活動と，百科全書的，博物学的なものへの関心である。南方は次のように書いている。

「幼少より学問を好み，書籍を求めて８，９歳のころより20町，30町も走りありき借覧し，ことごとく記憶し帰り，反古紙に写し出し，くりかえし読みたり。『和漢三才図会』105巻を３年がかりで写す。『本草綱目』『諸国名所図会』『大和本草』等の書を12歳のときまでに写し取れり。(中略)明治12年に和歌山中学校できてそれに入りしが，学校にての成績はよろしからず。これは生来物事を実地に観察することを好み，師匠のいうことなどは毎々間違い多きものと知りたるゆえ，一向傾聴せざりゆえなり」[44]

(矢吹義夫宛，大正14年１月31日付)

この中に出てくる「和漢三才図会」とは江戸時代中期大阪の医師寺島良安によって作られた我国最初の図解百科全書である。正徳３年（1713）全105巻（81冊）が完成している。

南方の写本は南方が終生の地として住んだ田辺の近くの白浜にある南方熊楠記念館にその現物が展示されている。筆者は会社勤務時代に和歌山工場にいたことがあり，この記念館で南方の写本を見た時の驚ろきを今でも忘れることができない。10歳前後の子供がこのように大部で難解な百科全書を３年間にわたって書き写したことに驚嘆した。それまであまり知らなかった南方に関心を持ち始めたのはこの時だった。薬物学の古典「本草綱目」，「大和本草」はそれぞれ，明の李時珍，貝原益軒により編集されたもので，これら三点の大著は南方の生涯愛読書となった。[45]

米国からロンドンに移った南方の生活は変らなかった。幼少年期と同じ自分が興味を持つ分野への自学自習である。勿論学校へなど行かない。そんな折，週刊自然科学雑誌「ネーチャー」に投稿した論文が採用され，こ

44) ibid., PP5-6
45)「日本博覧人物史」紀田順一郎，ジャストシステム，1995年，PP.263-264

れが機縁となって大英博物館長フランクスに識られるようになった。フランクス館長の世話で大英博物館に自由に出入りできるようになった南方は終日ここで過して学問に打ち込む。館員に就職はしなかった。館員になれば自由気ままな勉強ができなくなるからだ。

「この大英博物館におよそ6年ばかりおりし。館員となるべくいろいろすすめられたれども，人となれば自在ならず，自在なれば人とならずで，自分は至って勝手千万な男ゆえ辞退して就職せず，ただ館員外の参考人たりしに止まる。そのあいだ，抄出また全文を写しとりし。日本などでは見られぬ珍書500部ばかりあり，中本（ちゆうぼん）大の（ノート）53冊10,800頁に渉り（抄出）」[46)]

しかし，好事魔多し，ボーア戦争のため，夢としていたケンブリッジ大学日本学講座の話は立消えとなり，その講義・教授のポストも叶わぬ夢となった。しかも父が死に，弟からの送金も途絶え，帰国せざるを得なくなった。

「かくて乞食にならぬばかりの貧乏しながら2年ばかり留まりしは，前述のロンドン大学総長ジキンスが世話で，ケンブリッジ大学に日本学の講座を設け，アントン（「日本記」を英訳した人）ぐらいを教授とし，小生を助教授として永く英国に留めんとしたるなり。

しかるに不幸にも南阿戦争起こり……戦争は永くつづき，ケンブリッジに日本学講座の話も立消えになったから，決然蚊帳のごとき洋服一枚まとうて帰国致し候。外国にまる15年ありしなり」[47)]

南方の人となりについては，南方研究家笠井清氏の次の説明に尽きると思う。

「南方熊楠といえば，一般には超人的な博学者であるが，奇言奇行に富み，世間の礼節などは全く無頓着で，常軌を逸した豪傑のように思われがちである。なるほど正義感が人一倍強く，熱血漢であったので，官僚や官

46）「日本人の自伝⒀」前出，PP.12-13
47）ibid., P.22

学者の俗物どもを罵倒したり，時には激情にかられて乱暴な行動もあったが，根本においては純情篤実な学究であり，謙遜で礼譲をわきまえたゆかしい人柄であったのを見のがしてはならない」[48]

## ㈣ ケース・スタディ⒝（人脈）

### ⑴ その一

柳田の次兄は9歳年上の井上通泰である。幼名泰蔵。

12歳で同郷の医師井上碩平の養子となった。井上家は鎌倉時代の武将河野通有の一族といわれ，この通をとって通泰と改名した。

明治18年東大医学部に進学。通泰は在学中より歌に関心を持ち，歌人香川景樹に傾頭した。

通泰が東大医学部の先輩賀古鶴所（1855－1931）にともなわれて，初めて千住の鴎外宅を訪れたのは明治21年の冬。鴎外はその年9月ドイツ留学から帰ったばかりであった。通泰を賀古に引き合せたのは東大医学部で通泰の一級下の賀古の弟桃次である。[49] 鴎外を知った通泰は，鴎外に知人の落合直文と市村讃次郎を引き合せる。こうしてこの四人は鴎外を中心に文学同人「新声社」を結成し，訳詩集「於母影」が生れ，「於母影」の成功による五十円の収入を基に雑誌「文学評論しがらみ草紙」が明治22年10月創刊される。[50]

編集の分担は，詩文が鴎外，漢文と漢詩が市村，和文は落合，歌が井上，戯曲が森篤次郎であった。[51]

柳田は次兄通泰の慫慂により第2号（明治22年11月）に投稿し，「夕がらすねぐらもとむる山寺ののきにほすなり墨染めのそで」が掲載された。

48)「南方熊楠外伝」前出，P.150
49)「柳田国男伝」前出，P.67
50) ibid., PP.86-69
51) ibid.,P.69
52)「柳田国男（日本文学研究資料叢書)」前出，PP.19-20

また，郷里播州の歌人秋元安民のことを記した「秋本安民伝」が松岡約斉口授，松岡国男筆記として「しがらみ草紙」第9号（明治23年6月）に掲載された。[52]

柳田が千葉県布川の長男鼎宅から上京し，次兄通泰の家に同居したのは明治23年の冬。翌24年通泰は大学を卒業し，大学の助手を兼ねながら自宅で井上医院を開業した。この井上医院は文学仲間の溜まり場になった。この年の冬，柳田は次兄に連れられて鴎外宅を訪れた。鴎外は通泰の弟柳田をよく知っていた。「しがらみ草紙」に「秋元安民伝」や「桂園叢話」を投稿し，掲載されていたからだ。後者は，通泰が読み漁った歌人香川景樹関連事項を柳田に色々と話り，これを柳田がまとめたものである。

柳田も次兄の感化から鴎外の書いたものをよく読み，鴎外を尊敬していた。「しがらみ草紙」に連載されていた「即興詩人」は，「満身の興味を傾けて愛読」していた。[53] 柳田16歳，鴎外28歳，井上25歳である。

柳田はその後の「めざまし草」（明治29－32年）の時代まで鴎外宅をよく訪れた。

一高から東大へと進んだ柳田は鴎外から直接外国文学や新体詩の話を聞いた。晩年にいたるまで，無意識の話にもその影響が出るほどの強い影響を受けた。[54]

柳田は次のように書いている。

「医者で文学に親しむというところから，井上の兄は森鴎外さんとつき合って『しがらみ草紙』『めざまし草』以来いろいろと協力していた。私が10代の子供のころ，秋元安民伝を『しがらみ草紙』に寄稿したのも，兄との関係からであった。……私なども自然に感化を受け鴎外の「水沫集」など文章のいい所は暗記していたほどであった。……子供だった私は森さんのお宅に伺うとお菓子が食べられるので，よくお訪ねしたが，『万年草』の時代には行かなくなっていた。高等学校のときでも，訪ねて行くと案外

53) ibid., PP.22-23
54)「柳田国男伝」前出，PP.72-73

会ってもらえたことを憶えている。『いまは何を読んでいる？どんなものが面白い？』などという風なことを聞いて可愛がって下さった。……森さんという人は，私どもには大きな影響を与えた人であった。……森さんはこちらの方に降りて来て，いろいろと相談に乗ってくれる人だったから，これだけは本当にありがたかったと思っている」[55)]

井上通泰はその後明治26年春，姫路病院に赴任し，明治28年７月，第三高等学校医学部眼科教授に招かれ岡山に移る。後に県立病院眼科医長を兼務する。明治25年，岡山医専（旧三高医学部）を辞任した。校長菅之芳との衝突が原因ともいわれている。辞任後は直ちに上京し，麹町内幸町に居を構え，眼科医院を開業。岡山時代は史学研究に励み，「蕃山伝」や「続蕃山伝」等を著述した。一介の町医者になってからは，歌に専念するようになった。[56)]

明治37年「日本新聞」にて歌壇の選歌を始める。前任は正岡子規だったが，子規没後は適任者がいなかったのだ。この年から38年にかけ「城南荘歌話」と題する近世から現代に到る歌人の歌評を連載した。この連載は相当の反響があり，その中の一人に山県有朋がいた。明治39年春，山県は腹心の道家斉を井上宅に派遣して会見を申し入れた。道家は当時，内閣法制局の筆頭参事官でその下に参事官の末席でいたのが柳田である。このことは前述した。

井上は小石川水道町にあった山県の別邸「新々亭」に行き，山県と会って歌道に関する考えを述べている。日露の戦役に勝利し，ようやく愁眉を開き，参謀総長の職を辞して半年後の山県であった。[57)]このことが契機となって森鴎外のキャリアに重大な影響を及ぼす「常盤会」という歌会が生れる。

山県はその墓柱に「枢密院議長元帥陸軍大将従一位大勲位功一級公爵山

55)「日本人の自伝⒀」前出，PP.286-287

56)「柳田国男伝」前出，PP.73-75

57) ibid., PP.76-77

県有朋之墓」と彫られているように，明治から大正にかけて特に伊藤博文の死後は陸軍界のみならず日本政界に君臨していた。

「陸軍の大御所」であり，その強い力から「内閣製造者」であるとともに「内閣倒壊者」でもあった。山県の一挙手一投足につれて山県閥は動き，一顰一笑に政治家は喜憂したといわれる。[58)]

山県は権力欲の権化のような人物であったが和歌や造園には造詣が深かった。東京の椿山荘，京都の舞隣庵，小田原の古稀庵などは山県の美意識を結晶させた名園といってもよいものである。

山県の歌としては戊辰戦争の折の，「あだまもるとりでのかがり影ふけて夏も身にしむ越の山かぜ」はよく知られ，西南戦争時の「木留（きどめ）山しらむ砦のすてかがりけぶるとみしはさくらなりけり」は名歌の評がある。

山県は慎重な性格で，神経質であった。人に接して寡黙で謹厳，容易にうちとけようとしない。初めは容易に人を信用しない。ただ何度か会って信用し始めると思い切って信用するタイプだ。山県の許へ親しく出入りしていたある人は次のように回想している。

「余は山県といふ人は唯寡黙と云ふばかりでなく軍事以外の談話は極めて不得意であると（最初は）判断したのであるが，爾来漸く相親しむに及んで，公は最もよく語る人で，本領の軍事政務は勿論，教育，宗教，謡曲，詩歌，築庭，建築或は風流艶話に至るまで話題は極めて多いことが分った」[59)]

井上が山県に招かれて歌道の所見を述べたすぐ後に鴎外と賀古鶴所が相次いで満州の戦地から帰還した。第二軍軍医部長たりし鴎外の帰還は明治39年1月。予備役となり眼科医を開業していた賀古は日露の戦役で応召を受け遼東守備軍兵站軍医部長となり，軍医監（陸軍少将相当官）に進級していた。賀古の帰還は同年4月である。[60)]

58)「山県有朋」岡義武，岩波書店，1972年，P.i,

59) ibid., PP.45-46

60)「柳田国男伝」前出，P77

賀古は東大医学部で鴎外と同期。明治14年同校を卒業と同時に陸軍軍医となる。これも鴎外と同じだ。3年後軍医学校教官，更に明治21年には陸大の教官を兼務し，軍陣衛生学を講じた。この年12月，自治制度調査のため渡欧する内務大臣山県伯爵に随行して欧米巡遊し，翌22年10月帰朝した。この時の巡遊で山県の知遇を得，山県から信頼されるようになった。[61]

明治29年予備役[62]

賀古は鴎外が生涯心を許した親友である。

井上は次のようにも語っている。

「公（山県）が歌を尊重される念は非常なもので，之を単なる芸術として見るのでなく，国民思想の淵源と見て居られたから，それだけその態度も謹厳であったのである。而して公が如何に時代に順応して新しい歌を翹望されたかといふ事を最も顕著に語るものは，常盤会の創立である。恰度明治39年の事で，『どうも現代の歌壇を見るに，極端な新派と旧派とが有り………であるから現代の大家が寄合って相談の上，歌壇の燈明台となり，さうして正しい方向を定めて貰うことにしたい』という公の希望でもって，森林太郎，賀古鶴所の両者が幹事となり，佐々木信綱………の三君と私と4人が選者となり，それに公爵を加え都合七人が会員となって，比の会が生れたのである。そして毎月1回づつ題を定めて，各選者の門人に出詠させ，それを持寄って選評して傍聴せられた。」[63]

当時の山県の権力者としての高さ，近寄り難さは現代では想像もつかぬ位だ。この山県が一会員となり，多忙な公務を割いて毎月一回出席したこと，例会は多く山県の私邸が供せられたこと，山県の死後直ちに解散されたことなど考えると，山県の強い熱意がこの会を作らせたともいえる。山県の歌への熱意を知った井上が親友の鴎外，賀古にその話を伝え，山県好

61)「森鴎外私論」PP.117-118
62)「鴎外屈辱に死す」前出，P.40
63)「続森鴎外私論」吉野俊彦，毎日新聞社，1974年，PP.87-93
「森鴎外（日本文学研究資料叢書）」有精堂，1970年，PP.127-128「森鴎外と常盤会」古川清彦

みの歌人を集めて，賀古が山県との意思疎通役となって，この会が成立した。

一同は7月新々亭で山県と会い，第一会の会合は飯田町の賀古宅で開かれた。この時，山県は69歳，鴎外45歳，賀古52歳，井上41歳。会は山県の死の大正11年まで延べ185会に渉って続けられた。明治40年4月の第8回例会席上で選ばれた歌に柳田の次のような歌がある。

「夕月の影おもしろみいでて見れば，まがきの花もちる夜なりけり」[64)]

この常盤会は鴎外の陸軍でのキャリアに大きな意味を持つこととなった。

渋川驍の「森鴎外作家と作品」に次のような記述がある。

「山県は……武人だったが，彼は文事にも意を用い，和歌，漢詩，書道には殊に熱心で，そのほか茶道，生花，謡曲，造園と非常に趣味の広い人だった。そういう文化的方面で気持よく話し合える人が欲しかったのであろう。

そういう意味では，鴎外に勝るような人は滅多になかったにちがいない。………常盤会の集りは，文事や趣味のことが話題の中心になっていただろうが，時に政治や思想の問題に話題が移ってゆくこともあったろう。小池（医務局長）がこれ（局長を引退し，鴎外にポストを譲ること）を決意せずにおれなくなったのは，それだけの理由があったからに違いない。鴎外が常時（毎月一回）山県有朋に近づいていたことを無視するわけにはいかない。………陸軍を自己の権力のもとに収めていた山県の動静は，小池にも一種の重圧をあたえないではおかなかったであろう。………（鴎外の医務局長就任）の翌々日彼（鴎外）が山県を訪ねているところを見ても，これが山県の擁護によるものであったことが充分想像される」[65)]

鴎外が山県有朋に知られるようになったのは，小倉左遷中の鴎外が第12師団長の井上光，同師団参謀長の山根武亮の勧めにより，クラウゼビッツ

64)「柳田国男伝」前出，P79
65)「続森鴎外私論」前出，PP.95-96

の「戦争論」の講義を同師団の将校を対象に行ったことがきっかけであった。井上は長州出身で山県に近く，且つ鴎外を冷遇し続けてきた軍医のボス的存在の石黒忠悳に批判的であった。井上が山県に鴎外の力量を伝えたことは容易に推測できる。[66] 山根も長州出身で鴎外と同時期のドイツ留学組である。

鴎外の弟森潤三郎も次のように書いている。

「公（山県）には初め一向（鴎外を）認められなかったが，戦論（クラウゼビッツの「戦争論」）の翻訳から人物技量を見直され，後には大いに信用を得て，公私につけて庇護を被ったことは日記を見ても察せられるが，それには賀古氏が古くから公に信任されてゐたことが與って力あったものと思はれる」[67]

吉野俊彦は次のように書いている。

「石黒（忠悳）・小池（正直）体制の下で鴎外が陸軍省医務局長になる見込みはまず絶望的と思われていた。しかし……小池は心ならずも鴎外にその地位を譲らざるを得なかった。このように半ば奇蹟に近い事態が生じたのは，陸軍の大御所的存在である元帥山県有朋が，鴎外の擁護者として登場するに至ったからである。………その山県が鴎外の後継者として登場してきたとなると，いかに石黒忠悳が陸軍軍医のボスとして羽振りをきかせようとも，とうてい山県に歯のたつすべもない。ましてや小池においておやである」[68]

明治40年11月，鴎外が陸軍省医務局長に補された時，陸軍軍医監（陸軍少将相当官）から陸軍軍医総監（陸軍中将相当官）に昇任している。この時，現役の陸軍軍医総監は鴎外一人であった。大正元年９月28日，朝鮮総督府医院長の藤田嗣章が現役のまま軍医総監に任ぜられている。この藤田嗣章はエコール・ド・パリの画家として現代も人気の高い藤田嗣治の父で

66) ibid., PP.81-82, P.84
67)「鴎外森林太郎」前出，P.271
68)「続森鴎外私論」前出，P.79

ある。藤田嗣章の伝記「陸軍軍医中将藤田嗣章」に次のようなのがある。

「或る時菊池さん（朝鮮総督府農商工部農林局長の菊池武一）が用があって陸軍省人事局長を訪ねられた。その折たまたま寺内（正毅）総督がひょっこり来られて，外ではないが，朝鮮の藤田も軍医総監にしてやるがよかろうと言はれたまま立ち去られたさうだ。………寺内大将は朝鮮総督であられても，鶴の一声，その一言は陸軍では千鈞の重きを為して居ったと見てよからう」[69)]

寺内でさえこの通りであった。山県の力は寺内どころではない。

鴎外の軍医総監への昇進と医務局長就任に山県の力が大きかったことは多くの人々の指摘する所である。

現在の我々は鴎外を文学者として見る。彼の華藻文飾の才は余人を以て替え難い。軍医としての彼に代替し得る者はいくらでもいる。彼と同時代の文人に夏目漱石がいた。夏目は書斉（漱石山房）に常住し，文学研究が本来の自由人だ。森は毎朝馬で官衙に登庁し恪勤精励する高級官吏で吏道に忠実第一の人である。文学は彼にとって第二義のものだ。

松本清張はいう。

「森鴎外は徹頭徹尾官僚人だ。官僚人たるの資格は上昇志向にある」[70)]

小泉信三も「鴎外は偉大なる文学者であると共に，一面決して昇進や栄典に無頓着であり得ない官吏の心理に支配された人であった」と書いている。[71)]

大きな組織で仕事をする者にとって，組織内での昇進と仕事量は比例する。相当の力量を有す者でも組織内に然るべき地位を得ない限り力量の発揮し得ない。昇進のためには上司（ないし実力者）の信頼が不可欠である。

これは古今東西に通用する真理だ。

実力者の信頼を得るにはまず仕事であり，その後は面識を得ること，そ

69）ibid., P.104
70）「両像・森鴎外」前出，P.94
71）ibid., PP.94-95

うして日常の接触を得ることである。面識を得るためには，自分を推挙してくれる，気軽に動いてくれる，親友がおれば理想的だ。自分から直接自分を売り込むことは難しい。

森鴎外には山県へ対する幇間的言動が無くもなかった。友人の井上通泰すら「森は（山県に対し）いひたいこともいはずに控えてゐるのが，卑屈ともいひたいほど，歯がゆかった」[72]といっている。

これを批難する人も少くない。しかし，そういう人は組織内で大きな仕事をしたことがない人，ないしできなかった人だ。筆者は森の山県に対する鞠躬如とした態度に彼の吏道第一の真摯な心構えを見る。人は上司の貴族院議長徳川家達とケンカをして啖呵を切るような弾劾の手紙を送りつけ，辞表を叩きつけた柳田国男の行動に痛快を感じるかも知れない。

どらかを良しとするかは判断する人の人生観による。南方については，そもそも人に仕えることのできない人だ。もちろん，南方のような人もいる。文芸，美術といった方面ではむしろ南方タイプの人が後世に残るような仕事をする。

森鴎外のキャリアにとって，親友の賀古と軍の大御所山県有朋との繋がりはきわめて大きいものがあった。人のキャリアは自分の独力だけで築けるものではない。人脈のしがらみが人のキャリアを形成する。

鴎外のキャリアにとって，柳田の次兄の井上通泰の存在も重要だ。森銑三は井上から次のような話を聞いている。

「鴎外のことを話されるのに，森君といひ，林太郎君ともいひ，ただ森と呼棄てにもされた。……先生が森林太郎君，といはれる時，その語には，一種特別な親愛の情が篭められてゐるやうだった」[73]

「森に対しては，おれは貸しはあっても，借りはない，とはっきりいはれたのを覚えてゐる。その『貸しはあっても』の一語は，さような（山県

72)「森銑三著作集続編(5)」中央公論社，1993年，P.299
73) ibid., P.295
74) ibid., P.299

公との橋渡し）事実を指されるのではなかったかと思はれる」[74)]

いずれにせよ，人のキャリアにとって人脈が重要なことはいくら強調しても強調し過ぎることはない一例を森鴎外のケースでも見ることができる。

柳田が農商務省時代，山林問題が起こる毎に出張の機会を与えた上山満之進山林局長，内閣記録課長として内閣文庫の読書の便をはかってくれた江木翼はいずれも長州人である。[75)]

鴎外を擁護した，あるいは好意を持った山県，寺内正毅，井上光，山根武亮，乃木希典はいずれも長州人であった。敵となった石黒忠悳は岩代梁川，小池正直は羽前鶴岡，石本新六は播州姫路，といずれも徳川の親藩，譜代の藩出身で徳川方である。[76)]柳田の敵は徳川宗家第16代の徳川家達だった。

柳田は山県系官僚と見なされていたことは当然といえば当然であった。[77)]

鴎外の敵となった者が悉く長州系以外の当時の軍，官界の非主流系で，擁護有的立場にあった者が主流派の長州系だったことに筆者は一つの感想を持つ。

主流派にある者，ないし裕福順調にキャリアをたどってきた者は一般的にいって，もちろん例外はあるが——言動，思考に余裕がある。部下の美点を認めることに大度な所がある。非主流で，唯々己れの力だけに頼って組織のピラミッドを這い上ってきた人々は余裕に乏しい。職務以外の例えば文芸や美術に関心を持つ者に理解を示すことができない。眉をしかめる。意思は強靱であるが，嫉視排擠の念が強い。以上は筆者の実業界に身を置いたの30年間で感得したことであり，偏見との反説あれば，それを聞くに吝かでない。

明治の薩長出身の軍人は局量寛広の人物が多かった。非主流から高官に

75)「柳田国男伝」前出，P.321
76)「鴎外屈辱に死す」前出，P.175
77)「柳田国男伝」前出，P.321

這い登った昭和の将軍連は小廉曲謹にうるさいだけの人が少なくなかった。

### (2) その二

少壮の頃より柳田は旅行を好んだ。

明治41年6月、講演で立寄った熊本で柳田は日向の奈須という村のことを聞く。更に人吉の温泉でも、人吉の奥にあるこの村のことを聞いた。柳田は鹿児島から大分へ向う途中、日向口から馬車や人力車を乗り継いで、さらに、人一人がやっと通れる山道を歩いてこの村に入った。この宮崎県東臼杵郡椎葉村へ入る道は五つあるが、この五つとも途中八里の間は鳥もなかぬといわれ、一般の人の往来はほとんどなかった。狩人が稀に通るくらいだった。前もって、県庁から法制局の参事官が来るという電報を受けていた村では、道の両側の草を刈り取り、村長以下、村の入口まで羽織袴で出迎えた。柳田も旅姿ではなく、紋付に袴、白足袋姿で村に入った。

柳田はこの椎葉村で古くより伝わる狩りの故実にふれ、この時の体験が、山の民の語彙集ともいうべき「後狩詞記」として翌年結実した。[78] わずかに余った旅費で50部の自費出版をした。翌々年（明治43年）に出版された「遠野物語」とともに柳田民族学の出発点であった。[79]

南方と柳田との書信の交流の初めは明治44年3月19日付の柳田による南方への信である。発端は山神とオコゼに関することだった。柳田は3年前の明治41年7月日向の椎葉村に行き狩猟民の信仰の話を聞いて大いに興味を持った。椎葉村の一猟師から聞いたことによると、山猟に出かける前に、山神に海オコゼを一枚白紙に包んで差し出すと山の幸を授かるというのである。この話に関心を持っていた柳田は明治44年2月刊の「東京人類学会雑誌」（26巻299号）に南方の「山神オコゼを好むということ」が載ってい

78) ibid., P.250
79) ibid., PP.251-253
80)「柳田国男・南方熊楠往復書簡集」平凡社，1976年，P.5

るのを見た。

柳田は直ちに次のような信を南方に送り、山男についての協力を求めた。[80)]「拝啓。オコゼのことは小生も心がけおり候ところ、今回の御文を見て欣喜禁ずる能わず、また御一閲下されざるかと存じ候旧稿1、御座右にさし出し候。その後心づき候些々たる2、3点は来月の会雑誌にかかげ申すべく候。中国辺より若干の材料を引き出したものに候。………小生は目下山男に関する記事をあつめおり候。熊野はこの話に充ちたるらしく存ぜられ候。恐れ入り候えども御手伝い下されたく候。…………平日深く欽仰の情を懐きおり候ところ、かって『遠野物語』御覧下され候よしにて御引用下され候のみならず、今またオコゼの御説御表示下され候につけて、突然ながら一書拝呈仕候り。恐々頓首。」[81)]

これに対し南方は直ちに返信した。

「拝呈、19日付芳翰、正に今朝拝受。…………山男に関することいろいろ聞き書き留め置き候も、諸処に散在しており、ちょっとまとまらず、そのうち取りまとめ差し上げ申すべく候」

南方はその書信の中で地方官吏が強制している神社合祀に伴う、古社神林の濫伐により、土俗学、古物学上の風物の消滅や学術上の珍材料の生物が影を止めて消え失せる問題を訴え柳田に助力を乞うた。

「貴下、なにか然るべき新聞、雑誌等へ、右小生の議論の一部を御紹介下さるまじきや。小生の調書はなかなかの長文なれば、貴下なり誰なり、その重要の点を選抜し出し下されたく候」[82)]

このように柳田から南方への第一信は、法制省役人の職務とは全く関係のない事項であった。柳田は鴎外のように孜々として官務一途に勤めあげるタイプではない。もちろん、職務に精励はするが、自分の関心興味の向く道を憚ることなく楽しみ、快を味わおうとする所がある。これが柳田の

81) ibid., P.6
82) ibid., PP.6-7

キャリアの特色だ。南方は特定の仕事など思っていない。日常全てが自分の意の赴くままの生活である。

以降、両者の間には夥しい書簡の交流があった。明治44年には10箇月間で、柳田発信が30通、南方発信が65通。翌明治45年の前半6ケ月（後半は大正と改元）間に柳田発信12通、南方発信は45通である。

特に明治44年10月には南方よりの発信は20通、南方全集第8巻で102頁にも及ぶ量である。ちなみに、文通が始まった明治44年3月から大正元年の12月までの南方書簡は同全集で延べ345頁に及ぶ。

大正2年以降は両者間の交信は急減し、大正15年6月の南方信で以て終了する[83]。

柳田の民俗学への意欲に大きな力となったのは南方である。南方は民俗学関係の機関誌発行も奨めた。

「欧米各国みな Folk-lore Society あり。英国には G. T. Gomme もっともこのことに尽瘁し、以為（おもえ）らく、里俗、古譚はみな事実に基づけり。筆にせし史書は区域限りあり。僻説強牽の言多し。里俗、古譚はことごとく今を去ること遠き世に造り出されしものなれば、史書に見る能わざる史蹟を見るべし、と。………

わが国にも何とか Folk-lore 会の設立あたりきなり。また雑誌御発行ならば英国の「Notes and Queries」ごときものとし、文学、考古学、里俗学の範囲において、各人の随筆を問と答を精選して出すこととしたら、はなはだ面白かるべしと思う。………この通りのもの出したら、大いにはやることと存じ申され候。」[84]（明治44年6月12日付）

「Notes and Queries」は英国の芸術・文芸・社会、自然科学などの情報交換雑誌である。

柳田は民族学関連の雑誌発行を決意する。両者の書簡を記す。

83) 柳田と南方の往復書簡については「柳田國男・南方熊楠往復書簡集」前出と「南方熊楠全集(8)」平凡社，1972年を参考にした。

84)「柳田国男・南方熊楠往復書簡集」前出，PP.44-45

「小生計画の雑誌は3月末または4月始めより出すことと致し候。1号御覧の上御気にかない候わば、随時御寄稿をねがいたく………

小生はとにかく独力にて文章報国の事業に着手致すことにきめ申し候」[85]（南方宛大正2年1月21日付）

「フォクロアの研究法とでもいうべきものを御書き下さるまじくや。これは地方の後進に対して大いなる誘掖にて、兼ねてこの学問を盛んならしむる所以かと存じ候」[86]（南方宛大正3年4月10日付）

「民俗学入門ともいうものは、小生久しく心がけおり、70日もかかればちょっとしたものは出来申し候。これはたしかに収益の見込みあれば作り申すべく候」[87]（柳田宛、大正3年4月14日付）

柳田と南方の交流に関して、柳田は主として南方に民族学関連の教示を乞い、南方は柳田に神社合祀反対運動関連で助力を乞うた。

柳田は南方からの影響を強く受けて雑誌「郷土研究」を大正2年3月に創刊する。

これは大正6年3月まで続くが、これが柳田の組織的な民俗学への道の第一歩となった。日本民族学にとって南方熊楠が父、柳田国男が母という人（宇野脩平）もあり、南方を「民俗学の父」と呼ぶ人（手島史彦）もいる。[88]

兄魯迅が毛沢東に評価せられたことにより高い評価を受けていたのに比べ、従来評価の低かった弟の周作人（北京大学教授）は近時とみに評価が高くなっている。[89] 日本留学時代に柳田の「遠野物語」を買った周作人は早くから柳田の「郷土研究」を定期購読していた。中国民俗学の祖といわ

---

85) ibid., P.314
86) ibid., P.351
87) ibid., P.356
88) 「クニオとクマグス」米山俊直，河出書房新社，1995年，P.164
89) 「図書（1997年1月号）」岩波書店，PP.28-33，「魯迅の人道湾旧居をめぐって」三宝政美
90) 「文学（1997年冬号）」岩波書店，PP.104-107「中国民族学者江紹原と熊楠」小川利康

れる江紹原は北京大学の学生時代周作人の知遇を得て、民俗学関連に興味を持つようになっている。[90]

南方が柳田に助力を乞うたのは、明治39年12月より内務省の意向で始められた1町村1社を標準に神社を統合せしめようとした神社合祀問題だった。南方はこれに反対し，反対運動を起していた。南方が反対したのは神社濫滅のため土俗学，古物学の資料となるものが消え，また神林濫伐のため，他日学術上の珍材料ともなるべき生物が影を止めなくなることを憂えたためである。[91] 現在の自然保護運動のはしりといってもよいものだった。

筆者の母方の実家の近くでも幽邃（ゆうすい）な境内を持つ神社がこの時潰された。伐り倒された楠の大樹は砕かれて樟脳業者の手で何日も煮られたとのことである。

南方から援助依頼の書信を受けた柳田は南方の考えに同感の所があり，柳田なりの努力をした。柳田は後に次のように書いている。

「……この方針（神社合祀）の善悪といふよりも，寧ろ奸譎の徒が之を悪用した場合に弊があった。三重，和歌山の二県などは，神の森に樟や樅杉の巨木があった為に，大阪辺の商人が背後から合祀の運動をするなどといふ悪評さへあった。私は直接関係しなかったが，南方熊楠といふ植物学者などは，之に憤慨してあばれまはり，刑事問題までも引起した。………しかし，是は地方の実情，一つ一つの神社の具体的な状態によって知るべきで，基本財産五千円以上などといふ全国的目標を立てて存否を決すべきものではないと私なども痛感した」（「氏神と氏子」）[92]

内務省の神社局がその土地の人々の信心を少しも考えず，建築物，基本財産，専門神職の有無といった外観だけで統廃合を判断するのはよろしくないと考えた少壮の山県系官僚柳田は内務省神社局長の水野錬太郎や山県有朋を動かすことによってこの神社合祀政策をやめさせようと考えたが成功しなかった。

91）「柳田国男・南方熊楠往復書簡集」前出，P.7
92）「柳田国男伝」前出，PP.335-336

「水野博士（神社局長）を始め其頃の当局には知友が多いので，折にふれて意見を述べて見た。しかし如何ともし難いことは，神社は宗教に非ずといふ見解が既に国是の如く固定して居て，一人や二人の考へでは変えられない。結局是は山県公なる者を動かす外は無いといふ気持になったのだが，それも失敗であった。少年の頃から私を我子のやうに愛してくれた賀古（鶴所）といふ軍医が山県に親しいので，斯ういふ意見を説きに行くのだから紹介してくれといふと，それは無駄だから止めた方がいい。きっと老公は斯ういふからと，今まで何度か傍で聴いて居たと見えて，彼の口吻までを真似して，私の希望をはね付けた。…」(「氏神と氏子」)[93]

山県らが恐れたのは，国民一般の道徳となっている伊勢神宮などへの敬神と，キリスト教会に出入する信仰とが同一レベルの問題となって論議され，これが憲法の信教自由条項の解釈とからみ合って問題となることだった。山県らは既にこのことを考え抜いていたのだった。

90年後の今日でも，キリスト教信者が「お地蔵様」の移転を公費で行うのがけしからぬ，とか，神道関係行事と地方公共団体との関係につき憲法の信仰自由の条項を口実に執拗に異議を繰り返している。山県はこのようなことと懸念していたのである。

南方は神社合祀を古い土俗の習慣や神域の自然が失われることと懸念し，直情径行的に反対運動を行い，少壮官僚の柳田は南方と同様の懸念から内務官僚や自ら内相の経験を持ち内務省に絶大な権力を持つ山県を動かしてその阻止を図ろうとした。

内務官僚や山県は，国内統合という別の視点からこの問題を考えていた。

すなわち，南方はこれを学問の視点から，柳田は学問と官僚組織の視点から，内務省や山県は統治，政治の視点からこの問題を考えた。

人々の思想や行動はその人のキャリアにより成立する所が大きい。神社合祀問題に関して，南方は学問上，景観上の問題として周辺の思惑など考

93) ibid., P.336

えず直線的に行動した。柳田は自己の人脈を利用してキーマン的存在の人を動かそうとした。そのキーマンたる山県は，この問題を単なる学問上，景観上，宗教上の問題を超えた「国体」の問題としてとらえざるを得なかった。

南方は組織の人ではない。狭い日本の学界で生きることのできる人でもない。これは日本の学界そのものを眼中に置かぬ彼の次のような言葉によく表されている。

「蕞爾(さいじ)たる東大などに百五十円や二百円の月給で巣を失わじと守るばかりがその能で，仕事といえば外国雑誌の切り読み受け売りの外になき博士，教授などこそ真に万人の愍笑の的なれ」[94]

「むかし，かかる学問をせし人はみな本心よりこれを始めり。しかるに，今はこれをもって卒業または糊口の方便とせんとのみ心がけるゆえ，おちついて実地を観察するに力(つと)めず，ただただ洋書を翻訳して聞きかじり学問に誇るのみなり。それでは，何たる創見も実用も挙がらぬはずなり」[95]

## (五) ケース・スタディ(C)共通するもの

### (1) 時間活用

3人に共通するものは自分の関心事への孜々として倦むことなく続けられた機械的な知的作業である。このことなくして3人のキャリアはなかっただろう。

鴎外は休日を除いて毎日官衙(かんが)に登庁し，夕刻帰国する毎日だ。しかも精励格勤である。勤務時間に余裕があり，関連の文学を講ずる大学教授ではない。しかも文壇の中心地から離れることも多かった。日清戦争で1年間従軍（第2軍兵站軍医部長），九州小倉への転任（第12師団軍医部長）で3年間小倉住，東京へ帰って（第1師団軍医部長）からも，すぐに日露戦

94)「日本人の自伝(13)」前出，P.27

95) ibid., P.26

争で2年間満州の地（第2軍軍医部長）にいた。

夕刻帰宅してからの文学の楽しみに身を置くことも，しばしば陽に陰に官事拋擲と批判された。

鴎外自身の声を聞こう。

「此訳（「即興詩人」）は明治25年9月10日稿を起し，34年1月15日完成す。殆ど九星霜を経たり。然れども軍職の身に在るを以て，稿を属するは，大抵夜間，若しくは大祭日日曜日にして，家に在り客に接せざる際に於いてす。……世或は予其職を曠（むな）しくして，縦（ほていまま）に述作に耽ると謂ふ。冤も亦甚しきかな」[96)]

「軍務多忙の閑暇をぬすんで，10年の永い歳月，よく筆力に緩みの生ぜず，あれだけの名文をなされたものと，歎賞措く能はざるものがある」（茅野蕭々「森鴎外先生」）[97)]といわれるゆえんである。

鴎外が寸暇を利用して文芸に励んだことは彼の小説「追儺」を見ればよい。

「役所から帰って来た時にはへとへとになってゐる。人は晩酌でもして愉快に翌朝まで寝るのであろう。それを僕はランプを細く置いて，直ぐに起きる覚悟をして一寸寝る。12時に目を醒ます。頭が少し回復してゐる。それから2時まで起きてゐて書く。」[98)]

井上通泰は鴎外が物を書き過ぎると評した。森銑三は次のように書いている。

「井上先生が，書き過ぎることが森の欠点だといってゐられる。しかしそれに附け加へて，けれども，もし森が書くことを止めさせられたなら，恐らく病気になるだろうと，といってゐられる。これらは，智者の言といふべきであらうとは思はれる」[99)]

96）「森鴎外私論」前出，P.235
97）ibid., P.236
98）「両像・森鴎外」前出，P.138
99）「森銑三全集続編(5)」前出，P.298

柳田は鴎外とかなり異なる。柳田は官吏であった時も時間的余裕はある役所勤務だった。よく地方旅行をした。法制局が一番長かったが，ここは研究所のような雰囲気のある役所だった。貴族院書記官長も各行政省の局長や次官に比べると閑職である。44歳の若さで官を退いてからも，朝日新聞社勤務では自分の執筆（社説）が仕事である。筆を執ることをいとわぬ柳田は多くの紀行文や文化評論の社説を書いた。

月給は300円の高額の上に，旅費は会社持だった。同時代に論説委員だった前田多門は次のようにいっている。「(論説委員の）勤務時間も，あって無いやうなものであり，大抵，午少し過ぎに出社して，夕方まで，クラブに居るような気安さで，雑談に時を費やし，たまに論説を書く時は，夕方からはじめて，締切りの九時頃までに仕上げればよい。その論説書きの順番も，一週に一度，多くて二度といふのが通例だから，全く道楽商売であった」[100)]

柳田の日常生活はどうだったのか。次は三女三千の想い出である。

「夫と私の父は勉強の時間について話し合っている。就職がきまった場合に，勉強の時間がなくなりはしまいか，という夫の質問に，父はこう答えている。『私は役人をしながら勉強したものであるが，勉強のできるできないは仕事にもよるが，心がけ次第だ。１日に１時間でも２時間でも勉強できれば，まずまずよいと思わねばならない。長い年月のことだから』と。……しかし実際のところ，結婚当初の私としては，夫が書斉に篭る時間が少ないのを意外に思っていた。家にいる間は終始書斉ですごしていた父を見ていたので，学者は朝から夜まで書斉にいるという観念を持っていたのであろう。父のような人が稀有の存在であることを知らなかったのである」[101)]

「父の仕事に対する熱意はいよいよ高まり，外へ出ない日は殆ど机の前を離れなかった。……何時どんな時にはいって行っても，父がぼんやりし

100)「柳田国男伝」前出，P.658
101)「父との散歩」前出，PP.173-174

ているのを見た事がない。

父はあくびをした事がない，と言われて気づいた事だが，一度だって父の仕事に倦んだ様子を見た事がなかった」[102)]

「時間が惜しいと言い乍らも，父は散歩にだけは多くの時を費していた。裾短な着物に白タビをはき，ステッキをついて，さっそうとあるいていた父の姿が今の目に浮ぶ」[103)]

「父は自分なりの几帳面な生活規則を保っていた。ていねいな洗面がすむと，すぐ階下の食堂へ降りて行く。………食事がすむと，一刻も無駄にできないという様子で隣室の書斉へ入る。父は書きものに倦むということはないようであった。筆がすすまぬといって放り出すこともなかった。暇さえあれば，一日でも書いていたい，そのような気持であったと思う」[104)]

「父のこのような生活態度は，たしかに余裕のないものであった。……もし父が一般の父親のように皆との附き合いに重きをおいていたら，あれだけの仕事はのこすことができなかったのでないかと思う」[105)]

「どんな時でも父は，広い部屋（書斉）の東南の陽にある書机に向ってものを書いていた」[106)]

柳田は農政，社会，文化の面で健筆を振るっていた。朝日新聞社で社説だけでも389編を執筆した[107)]。

南方は時間に束縛されることを極端に嫌った。娘の文枝によると，「父は時間というのが嫌い。時計が一切嫌いで，生命が縮まるように思う」ような人である[108)]。

その代り，集中力はすごかった。八畳の離れの書斎に入って仕事を始め

102)「柳田国男」牧田茂，中央公論社 1975，PP.116-117
103) ibid., P.118
104)「父との散歩」前出，P.112
105) ibid., P.114
106) ibid., P.116
107)「柳田国男伝」前出，P.658
108)「父南方熊楠を語る」南方文枝，日本エディタースクール出版部，1982年，P.32

ると食事時間などに全く関係なくぶっ続けで仕事をする。食事をいつ済ませたかも覚えていない。夏だと少しうたた寝をする位で３日くらいはほとんど寝なくて仕事をする。[109]

ロンドン時代には連日大英博物館に通い，旅行記，地誌学，人類学，性愛学，博物学等五百冊前後の単行本，雑誌から，書き抜きと作っている。「ロンドン抜書」と呼ばれるものがこれだ。250頁のノートには，英，仏，伊，独語など余白もないほどびっしり書き込まれ，52冊に及んでいる。(本人の書いた履歴書には53冊と書かれているが現存しているのは52冊)[110]

また，柳田と盛んに文通していた明治44年から大正２年の頃には仏書の写本や抄本を連日のように行っている。これが，いわゆる「田辺抜書」だ。日本紙の罫紙の一行に，二行づつ米粒大の細字で書かれたもので，125字詰20行400頁のノートが60冊にも及んでいる。[111]

南方は膨大な書簡集を残した。何故そのような文量の書簡を書いたのか。南方は柳田への信で次のように書いている。

「ライプニッツは doctor universale（一切知）といわれし。常に書状を知識の貯蓄所（レパートアール）（あずけどころ）なりとて念入れて書き今に遺れり。その他の学者いずれも深奥重畳の学問の底処は公刊せず，多くは後年を期して一，二会心の友に書き与えしものなり（ダーウィンなどすら然り）。これ欧州に死後集の出板多き所以（ゆえん）なり。小生も今後ひまあらば，せめてこの状ごときものを多く筆し，貴下に頂け置くべし」[112]（柳田宛明治44年10月25日付)

南方が書簡を書き始めるとすざましいことになる。明治44年９月27日から30日にかけては，たて続けに五本の書簡を柳田に書いている。文量は全集で31頁分，３万字である。９月27日には朝４時から午後３時までに２本，

109) ibid., PP.14-15
110)「南方熊楠一切智の夢」松居竜王，朝日新聞社，1991年，PP.123-124
111)「南方熊楠」笠井清，吉川弘文館，1967年，PP.198-199
112)「柳田国男・南方熊楠往復書簡集」前出，P.189

28日午前2時から1本（全集で6頁分），同日午後2時50分から翌29日早朝までに1本（全集13頁分），29日夜から30日午前2時までに1本（全集8頁分）を書き上げている。この手紙は自分の英文論文「神跡考」の翻訳を行ったものを含んでいる。[113)]

ちなみに南方の柳田への書簡は明治44年3月21日付から大正15年6月6日付まで161通に及び，字数は400字詰原稿用紙で1200枚くらいに相当する。[114)]

このような南方の執筆ぶりは何か物に憑かれた感を受ける。

日記を終生怠らず，生涯の日記の分量は400字詰原稿用紙で1万2～3千枚になる。[115)]

このような南方を精神医学的に過剰書字 hypergraphia ないし書漏 graphorrhea という点からスポットをあてる研究家近藤俊文氏もいる。[116)]

南方自身，柳田への書簡で次のように書いている。

「小生は元来甚しき疳積持ちにて狂人になる事を人々患えたり。自分此事に気がづき他人が病質を治さんとて種々遊戯に身を入るるもつまらず，宜しく遊戯同様の面白き学問より始むべしと思い，博物標本を自ら集る事にかかれり。これは中々面白く又疳積など少しも起さば，解剖等微細の研究は一つも不成，此方法にて疳積をおさうるになれて，今日迄狂人に成ざりし。」[117)]（明治44年10月25日付）

南方の粘菌学への打ち込みぶり，各種観察図の膨大な量も，平凡な常識人を超越するものがある。

「小生久しく菌学を修め，ただいまおよそ七千種の日本産を集めあり，内四千種は極彩色に図画し，記載を致しあり，実に東洋第一の菌類の大集

113)「天才の誕生」近藤俊文，岩波書店，1996年，PP.55-56
114) ibid., P.68
115)「現代詩手帖」1987年7月号，P.95，(長谷川興蔵「青春期から雌伏の活躍へ」)
116)「天才の誕生」前出，P.57
117)「柳田国男・南方熊楠往復書簡集」前出，P.177
118)「日本博覧人物史」細田順一郎，㈱ジャストシステム，1995年，P.275

彙に候」[118]（中井秀次宛）

南方ソサエティの調査では彩色図の実数は2034枚。標本カードは約4500枚という。[119]

森，柳田，南方の仕事ぶりを見ると，日々の機械的作業がいかに重要かがわかる。高踏的なおしゃべりをしたり，空想にふけっていては駄目なのだ。こんなことを考えると映画界の巨匠黒沢明の言葉を思い出す。少し長いが引用したい。

「僕は今，日本の映画界で一番の弱点はやっぱりシナリオ・ライターがいないことだと思いますね……どうやって映画を勉強したらいいかと言えば，やっぱりシナリオを書くことですよね。僕もそう言われて，シナリオを書いて映画を勉強したわけです。シナリオを書くんだったら鉛筆と原稿用紙があればいいわけだから，たいしたお金もかからない。原稿用紙だって，わら半紙でいいんだよ。僕はいつもわら半紙で書いている。……だからぜひシナリオを書きなさいと言っているのだけど，だれも書かないんだよね。それがどういうことに原因があるかと思うと，バルザックも言っているんだけど，小説を書く仕事で一番つらいのは，一字一字書いて行くという退屈な作業のわけね。それで意志がくじけちゃたら，それっきりの話なんだよね。まず，その退屈な作業にたえられる習慣をつけなきゃだめだよね。」[120]

「助監督さんなんかにシナリオを書け，シナリオを書けって言っているんだけど，忙しいって言うんだよね。忙しいのは事実だけど，忙しいと言ったって，一日に一枚は書けるだろうと……。毎日一枚書いたら，一年で365枚の長篇シナリオが出来ますよ。……事実僕は仕事中にそうやって来たんだよ。忙しくたって，そのくらいのことは努力すれば出来るんですよ。夜，みんなが眠ちゃってから，二時間か三時間，がんばればね，何枚か書

119) ibid., P.275
120) 「黒沢明のいる風景」島敏光，新潮社，1991年，PP.162-163
121) ibid., PP.165-166

けますからね。……いくら考えたって，他に道はないですよ。天才というのはいきなり空から降りて来るわけじゃないですよ。ある意味では，努力が出来るという人が，天才なんだよね」[121]

「山さん（山本嘉次郎）は，監督になりたければ，先ず，シナリオを書け，と云った。私もそう思ったから，シナリオを一生懸命書いた。助監督は，忙しい仕事だから，シナリオを書く暇はない，と云うのは怠者だ。一日一枚しか書けなくても，一年かければ，365枚のシナリオが書ける。私もそう思って，一日一枚を目標に，徹夜の仕事の時は仕方なかったが，眠る時間のある時は，寝床へ入ってからでも，2，3枚は書いた。しかし，書こうと思えば，案外，書けるもので，何本か書き上げた。」[122]

当時，映画製作スタッフの望みは，大方，眠る事だけだった。それに，助監督は，他のスタッフが休める時間も，次の準備に追われて，休めるどころではなかった。こんな勤務の中で黒沢はこつこつとシナリオを書いた。

助監督時代のある日，黒沢は助監督チーフの谷口千吉の下宿で泊めて貰ったことがある。谷口が夜半に目がさめると，黒沢はローソクをつけ，燈がもれないように本などで囲んでシナリオを書き続けている。黒沢は原稿用紙が買えないから会社から持ってきたガリ板謄写のシナリオの真中をさいて裏の白い部分に書いている。谷口は，「カツカツというペンの音を聞きながら，オレはこの後輩に差をつけられるなあ」と思ったという。[123]

### (2)　文章

鴎外，柳田，南方に共通するものの一つはその文章力である。文豪鴎外は勿論のこととして，柳田，南方の文章には専門家の高い評価がある。鴎外については喋喋する必要はない。永井荷風，小泉信三，三島由紀夫の感想をあげておくに留める。

---

122)「蝦蟇の油」黒沢明，岩波書店，1984年，PP.218-219

123)「映画を愛した二人黒沢明・三船敏郎」阿部嘉典，報知新聞社，1996年，PP.20-21

「夜森先生の渋江抽斉を読み，覚えず深更に至る。先生の文この伝記に至り更に一新機軸を出せるものの如し。叙事細密，気魄勇勁なるのみに非ず，文致高遠蒼古にして一字一句含蓄の味あり。言文一致の文体ここに至って品致自ら具備し，始めて古文と頡頏(けつこう)することを得べし」[124]（永井荷風「断腸亭日乗」大正12年5月17日）

「和漢の文字をかくまでに駆使するということは，今後果して誰れが出て為し得るか。……『即興詩人』は和漢洋文字の珠玉をおさめた，日本文というものの到り得る極処を示したものとして伝えられるべきである」[125]（小泉信三「小泉信三全集第14巻」）

「鴎外の短篇小説の味はひが水のやうに尽きないのは，知的な乾燥度の高い文体とその無造作な話りによるのであらう。感覚に訴えないものは古びることがない。……

主語の思い切った省略，現在形の濫用，オノマトペの極度の節約，などの鴎外の文体の特色は短篇小説に限ったことではないが，短篇で一そう成果をあげてゐる」[126]（三島由紀夫）

永井荷風と同様，文章表現に極めて技巧的，意識的だった作家に泉鏡花，三島由紀夫がいる。この二人は柳田の「遠野物語」の文章を絶讃した。

二人の評をあげる。

「近ごろ，おもしろき書を読みたり。柳田国男氏の著，遠野物語なり。再読，三読尚ほ飽くことを知らず，此の書は陸中国閉伊郡に遠野郷とて山深き幽僻地の伝説異聞怪談を，土地の人の談話したるを氏が筆にて活かし描けるなり。敢て活かし描けるものと言ふ。然らざれば妖怪変化，豈得て斯の如く活躍せんや」（泉鏡花「遠野の奇聞」）[127]

「日本民俗学の記念塔ともいうべき名高い名著であるが，私は永年これ

---

124）「断腸亭日乗(1)」永井壮吉，岩波書店，1980年，PP.274-275
125）「森鴎外私論」前出，P.237
126）「三島由紀夫論評全集(1)」新潮社，1989年，P.335
127）「柳田国男伝」船木裕，日本エディタースクール出版部，1991年，P.17
128）ibid., P.18

を文学として読んできた。殊に何回読み返したかわからないのはその序文である。名文であるのみでなく，氏の若き日の抒情と哀傷がにじんでいる。魂の故郷へ人々の心を拉し去る詩的な力にあふれている」(三島由紀夫，読売新聞昭和45年６月12日)[128)]

仏文学者桑原武夫は遠野物語を，「簡古な文語体をして内容を完全に合致せしめ，一つ一つの語を素朴でしかも気品の高い短章としたことは卓見であり手腕であった。(「『遠野物語』から」)」と評している。[129)]

柳田の「遠野物語」の文体を，「金石に鐫(ほ)りつけるように，するどく，かたく，ほそい文体」あるいは，「蒼古雄勁ともいうべき古典性をおび」た文体という柳田研究家もいる。[130)]

柳田が文章に縷骨の苦心を払ったことについて金田一春彦の書いたものがある。

「柳田先生の講演・座談は定評があった。書かれた紀行文や小品には，余人の及びがたい珠玉の作品がある。論文は難解で，論旨が透明とは行きかねたが，しかし苦心の文章だった。晩年の先生の原稿の浄書の役を引き受けていた鎌田久子さんによると，相当推敲を重ね，稿を二回，三回書き改めることは珍しくなかったという。ことに，同じ語句を一枚の原稿用紙の中に二度使わないという鉄則を守られ，前に「日本」と書けば，二度目には「この細長い群島帝国」と改めるという風であった」[131)]

「先生の本を読んで驚くのは，専門語のないことで，あれだけがっちりした民俗学の体系を打ち建てられながら，ほとんど術語らしい術語を創作しておられない」[132)]

「先生はいわゆる標準語を目のカタキにされ，標準語は語彙が少ないか

129) ibid., P.14
130)「柳田国男伝」前出，P.265
131)「柳田国男（日本文学研究資料叢書)」有精堂，1976年，「柳田国男夫先生と国語学」金田一春彦，PP.65-66
132) ibid., P.66
133) ibid., P.67

ら，不自由だ，不自由だと言われ，ことに形容詞の少さを繰り返し歎じられた」[133]

谷崎潤一郎は夙に南方の文章に関心を持っていたようである。

谷川徹三の「折り折りの人」によると，昭和2年の夏，谷崎を訪れた時，谷崎は南方の「南方随筆」を読んでいた。南方は古今東西にわたる博引旁証，読者を驚倒させている中で突然ふざけた調子を入れる。谷崎は谷川に「一風変った文章を書く人だね」といった。[134]

谷崎はその後「文章読本」を書いた。

この中で谷崎は文章の要素を，①用語，②調子，③本体，④体裁，⑤品格，⑥含蓄，に分ける。②の調子に関しては，(i)流麗，(ii)簡潔，(iii)冷静，(iv)飄逸，(v)ごつごつした，の五つに分け，飄逸の典型として南方の文章をあげている。[135]

「(i)の流麗な調子の変態として，(iv)飄逸な調子と云うのがあります。これは南方熊楠氏の随筆………の文章が最もそれに近い。……此の調子は流麗調の変化したものでありますけれども，その名の如く飄々として捕らえどころのないものでありますから，技巧の上からは説明しようがありません。兎に角，これを書くには一切の物欲があってはいけない。名文を書いてやろうなどという，野心のあることが何より宜しくない。又，世道人心を益しようとか，社会の害悪を除こうとか，そう云う一切の裟婆ッ気を絶たなければならない。要するに，張り詰めたり，力み返ったり，意気込んだりすることは禁物でありまして，何等の気魄もなしに，横着にやりっ放しに，仙人のような気持で書くのである。…

唯，それこそ本当に東洋人の持ち味でありまして，西洋の文豪でそう云う風格を備えているものは，殆ど一人もないと申し差支えありますまい」[136]

柳田は南方の文章を次のように評している。

134)「南方熊楠外伝」前出，P.131
135)「文章読本」谷崎潤一郎，中央公論社，1996年，PP.99-100
136) ibid., PP.143-144

「南方さんは，後彙が豊富で，連想が最も鋭く，脇目もふらぬという集中力をもっていたので，文章の表現にかけては，かの人ほど自由自在な人は曽て見ないのだが，そのかわりには，少しく脱線が多過ぎ，殊に下がかった話を，突兀として出して来るのがすきであった。是れは局面の展開に有効だったが，同時にここばかり印象が濃くなって，全体の筋をはぐらかすという弊も多かった。多分は国内の初期の読者が，まともに学問を説いて聞かすだけの，張合いも無いような凡傭ばかりだったのと，もう一つは酔後奔放に物をいう癖が，段々と嵩じて来た為であろう」[137]（「定本柳田男集(23)」）

また，柳田は自著の「山島民譚」の再版の序の中で，この本の文章がすこぶる変っていることをあげ，何がこのような文章を書かせたのかについて次のように書いている。

「久しい昔になるのでもうこれという心当りはない。ただほんの片端だけ，故南方熊楠氏の文に近いようなところがあるのは，あの当時闊達無碍の筆を揮っていたこの人の報告や論文を羨み，また感じて読んでいた名残かとも思う。ただし，南方氏の文は，もちろんこれよりもはるかに自由で，かつさらさらと読みやすくできている。私の書いたものが変に理窟っぽく，また隅々の小さな点に，注意を怠らなかったということばかりを気にしているのは，多分に吏臭とでも名づくべきものだろう」[138]

南方の文体は自由奔放に見えるが，実は細心の苦心を重ねたものであることを見過してはならぬ。彼の論文の多くは前述のように英国の「ネーチャー」，「ノーツ・アンド・クエリーズ」に投稿された。

彼の英文を草す時の苦心の一端は次の柳田への書信によって窺うことができる。

「この人（アーサー・モリソン），平生小生の英文を見，ロンドンにある外人中，貴公ごとく苦辛して英文を書くものはあるまじ（これは小生一

137)「南方熊楠全集月報5（1972年4月）」P.2
138)「クニオとクマグス」前出，P.163

文作るに，必ず字書をしばしば見，なるべく同意味の語に異文字を多くつかうなり。かくせざれば長文は人が見あくなり)，今10年も修練せば大文章家なるべし。マクス・ミュラルなど学問はえらいが，英文は軽忽にかくゆえ，熊楠の文ほど煉れておらずとて，その例を示されし。……さて申し上ぐるは，この人の話に，英文は英語のみで書くべし，英語で言い得ることを，他国や古代の語用うるは，その人学問に誇る卑陋の見識なりといわれし。……外国の語を入りもせぬに用うる人にろくな文章なし。されば日本人は日本の文を書くに，なるべく和漢の語のみ用ゆべきと思う」[139)]

(柳田宛，大正3年6月2日付)

「故サー・バートン『アラビアン夜譚』を全訳せしとき，かかる長きものを（一千一章あり）一定の文調で訳するときは語種尽き，文調涸れ，読む者たちまち倦怠すべしとて，最古の英語からベランメー言葉，下等人の相言葉まで渉猟し，また英人に分かるべき語は，仏，西，独，インド，アラビアの雑語までも用いられし。小生も日本ごとき言詞少なき国に漢語ばかりいろいろ作り出して，貧乏，貧窮，窮困，窮乏，赤貧など出し分けたところが，貧の字，乏の字が多く重なるまでなれば，読者はいよいよ倦怠すべしと存じ，江戸っ子，上方詞の俗語，ベランメー語までも雑用して文章を書かんことを本邦人に勧むるところに候。」[140)]（柳田宛　明治44年10月25日付）

組織人は文筆の人ではないので名文を書く必要はないし，素人が名文など書けるはずもない。但し，達意の文章を短時間で書けるかどうかは，組織人の能力評価にかなりの影響があることは事実だ。

筆者が新入社員時代の上司の課長は何事にも一家言を持った人だった。この人はよく，「事務屋は達意の書簡が書けなくては駄目だ」とよくいっていた。筆者の起草した公用文は赤鉛筆で真赤に手直されて返ってくるのが常だったことを思い出す。

---

139)「南方熊楠全集(8)」前出，PP.437-438

140)「柳田国男南方熊楠往復書簡集」前出，PP.190-191

現在の調査資料や論文に関して次のようなことを感ずることがある。

調べる，情報を集める，分離整理する，比較する，解説する，ただそれだけ。文章は平明軽快だが，熱も力も品格もない。

森，柳田，南方の文章ないし，文章への態度は一般にも参考になることが多い。

### (3) 書斉

森，柳田，南方の三人はアカデミーの世界の人ではない。森は生涯陸軍，宮内省という官界で過した。柳田は官界（農商務省，法制局，貴族院）と民間（朝日新聞）で過し，朝日新聞社を辞して後は，何者にも拘束されず自由な研究活動を続けた。南方はアメリカ各地，ロンドンと自由気ままに過し，帰国後は紀州田辺の地で自分の関心，興味の赴くままに自由人として生涯を終えた。

このように三者は身の処し方は異なっていたが，常人の想像を超える知的業績を残している。そうして知的生産を行うための場としての彼等の書斉も当然のことながらレベルの高いものであった。学者に非ざる勤め人の生活でも，このくらいのレベルのものまで到達し得る可能性がある，ということで，三者の書斉の状況をうかがうことは意味のあることと思う。

森の場合は弟と息子の見たところを紹介する。

「書斉における兄は，自分の周囲は常に綺麗に整頓し，机は大小二脚を備え，右手の小机に硯，インキ壺，筆，ペン，鉛筆，錐，鋏等の文房具を平たい箱に入れて載せ，大机には書籍なり原用紙なり時に応じて置くといふ工合にし，小机の横から自分の背後に参考書，公用その他必要の書類を一山一山正しく重ねて置き，暗中でも入用のものは直ぐ分るやうになってゐる。……書棚の本を出し入れするにも，中途から引抜くやうなことはせず，上の方を取だして必要の部分を出し，見終ったらば元の如く一分の歪

141)「鴎外森林太郎」前出，P.281

142)「森鴎外（新潮社文学アルバム）」新潮社，1985年，P.63

みもないやうに重ねと置く」[141]（「鴎外森林太郎」森潤三郎）

鴎外の蔵書は和漢洋の12,000冊に及んでいる。[142]

「父は元気盛んな時代には家でも多く軍服で過し，身のまわりすべてキチンとしており，机上の書類，筆硯などその位置をくずした事はない。座布団の一側には小さな脇机（朱塗）と他側には草稿を分類して入れて置く小さい書棚，その他常用の辞書，参考書の類が定った位置に整えられて居った。そのほか，書斉（観潮楼下の六畳，晩年には離れの四畳半）の壁の一側は全部書棚でこの中の書籍（多く和漢書）も引抜いた跡が乱れていた事なんぞはない。……机の上ばかりでなく抽出しの中も常に整理され……室の中の掃除が不十分であると自分でごみを拾って歩くほど神経質であった。父は官吏としても忠実な事務家であったばかりでなく，居常は軍人らしく，恐らく宮廷の人としてもふさわしかったろうと思えるほど恭謙であった」[143]（「父親としての森鴎外」森於兎）

柳田国男の書斉は特別であった。その様子は写真集などで見ることができる。次の文は金田一春彦が父の京助とともに柳田を訪れた時の感激を書いたものだ。

「高校の２年生の秋のはじめ，父に連れられて，先生のお宅に参上した時だった。私は，先生のお宅を訪れる人が誰でも当初に経験するように，宏壮な書斉に驚き，蔵書の数に舌を巻いたが，それよりもまた悠々迫らぬ先生の風格と生活をりっぱだと思い，こういう学者の生活もあるのかと，それまでむしろ厭わしいものと見ていた〈学者の生活〉というものを改めて見直した。」[144]

この柳田の書斉については長男の為正が詳しく記述している。

「さて書屋内部の様子だが，階下南半分が父の書斉兼仕事場。正方形に近く，畳敷きなら四十帖ばかりの広間だが，床は他の室と同様ニス塗装板張り，終始家人が床油で拭いていた。四面ぐるりは高い天井ぎわまで造り

143)「父親としての森鴎外」森於兎，築摩書房，1979年，PP.246-247
144)「柳田国男」有精堂，前出，P.60

付け書架で埋め尽くし，その裾は造り付けの引き戸棚，このどちらも濃い茶塗装。書物の出し入れ用に頑丈な木製のはしごが四，五本常備され，これを上方の真鍮製横木にかけて登降する。室内には天井や壁面空白部に合わせて，白い漆喰い塗りの角柱四本が天井を支え，父はそのうち東南位の一本のかたわらに，これは市ケ谷旧宅から運んだセクレタリー型デスクを外光を背に北向きに据え，仕事に明け暮れの日常。これが戦後ずっとまで続いた。……手狭で不便な旧宅片隅のへや住みから，ひと目にわが蔵書を見わたすこの書屋の主人へと一転して，父には会心の日々だったに違いない。……北川壁面書架は大体洋書で彩りも派手，西側の天辺には『大日本資料』などの圧巻が並び東側には県史，郡史の類，南面は辞典，事典が主だった」[145]

家においても軍服姿で机上も書架も一分の歪みもないのが鴎外。宏壮な書斉で和服姿の温容な姿が柳田。南方の場合は大いに異なる。二階建の蔵が南方の書庫（一階）兼標本貯蔵室（二階）である。

一階の書庫は飾り気のない書棚に蔵書がぎっしり詰っている。約五千冊で，種類は和漢洋にわたっている。[146] 荒俣宏氏は，「おそらく熊楠の書庫は，すくなくとも西洋民俗学畑にあって，当時の日本に存在したどの蔵書よりも『完璧で広汎』であったと信じられる」[147]と書いている。

書斉の状況はどうか。河東碧梧桐の訪問記によると次の通りだ。

「中を見ると，そこらじゅう一杯に書籍雑誌類が積み重ねてあって，ほとんど足の踏み処もない。それに茶殻箱のような四角な箱や，百箪笥めいた重ね抽斗（ひきだし）なども不整頓な位置に据えてある」[148]タバコの空箱があたり一面に幾十となく散らかっている。天井から棚をつってあっていろんなもの

145）「父・柳田国男を想う」柳田為正，筑摩書房，1996年，PP.92-93
146）「日本博覧人物史」前出，P.254
147）「南方熊楠」荒俣宏他，平凡社，1995年，P.17
148）「南方熊楠百話」飯倉照平，長谷川興蔵編，八坂書房，1991年，P.171
149）ibid.,PP.171-175
150）「父南方熊楠を語る」南方文枝，日本エディタースクール出版部，1982年，P.18

が放り込まれている。クモの巣がついている。書斉だとはいうけれど，気のきいた納屋だ。小便をしたくなると書斉の前の庭へ出てする。[149]

夏には一糸まとわぬ，生れたままの姿で書斉生活を送る。[150]

南方が収集したおびただしい粘菌標本のほとんどは国立科学博物館の筑波植物園に収められ，ノート，植物採集用具，顕微鏡やルーペ，鉛筆などの遺品の多くは田辺湾をはさんだ六キロの所にある南方熊楠記念館に展示されている。[151]

森，柳田，南方の日常生活は，それぞれ謹厳，端正・温和，奔放という表現がぴったりだ。我々も各々が自分の体質にあった生活をして，自分のキャリア向上に勤めればよいことをこの三人から学ぶことができる。

## (4) 博覧強記

森，柳田，南方に共通するものの一つは，その博覧強記ぶりである。

鴎外は乱読で博覧強記。重要と思われることは全て暗記していたと伝えられる。但し，メモは細かくとっていた。書物は一生の中に一度役に立てばいい，学術的に貴いものなら何でも集めておく，と気象学会の報告書まで集めていた。松本清張は次のようにいう。[152]

「こういう百科全書的に知識があるから『渋江抽斉』や『伊沢蘭軒』のような考証随筆が書けたのである」[153]

柳田について，次のような森銑三の記述がある。

「先生（柳田の次兄井上通泰）にしても記憶力が人一倍よかったのであるが，柳田国男翁の絶倫の記憶力などは，やはりおっかさんからの遺伝に拠るものとは思はれる」[154]

金田一京助の「柳田国男回想」に次のような一文がある。

151)「日本博覧人物史」前出，P.254
152)「両像・森鴎外」前出，PP.209
153) ibid., P.210
154)「森銑三全集続編(5)」前出，P.296

「記録課長は，内閣図書館長を兼ねられ，内閣文庫内の秘本の蝦夷関係の文書を，課員の窪田君に命じて出して見せて下さるなど，こんな幸福がないと思うほど幸福だった。殊に驚いたのは，どの本を繙いても，赤い不審紙の貼られていない本のなかったこと，それは先生（柳田）がそうやってカードを取られた時の目じるしで，実は先生は文庫の本を整理されて全部置き換えた上，完全な目録まで作られる目的で，こうやって文庫の本を皆繙かれたものだったというに至って，先生の博覧の源が手に取るように解ったことだった」[155)]

南方の博覧強記ぶりは常人を絶するものがあった。柳田の南方評を読めばその一端が知られる。

「我が南方先生ばかりは，どこの隅を尋ねと見ても，是だけが世間竝みといふものが，ちょっと捜し出せさうにも無いのである。70何年の一生の殆と全部が，普通の人の為し得ないことのみを以て構成せされてゐる。私などは是を日本人の可能性の極限かと思ひ，又時としては更にそれよりもなほ一つ向ふかと思ふことさえある。……さういふ中でも私たちのびっくりしたのは，先生の知識の綜合力，着想の奇とも名づくべきもので，若い頃まだ米国に渡られる前から，よくも斯ういうものまで読んだ居られたと思ふものを，年とって後まではっきり記憶してゐて，それを適切な場合に片端から利用せられる。あの博覧強記に至っては，まさしく尋常の非凡を超越して居たといってよい」[156)]

「およそ1年半か2年間，毎日のように手紙をもらった。日によって1日に3，4回も便りが来るほど，じつに筆まめな人であった。驚くべき記憶力と綜合力の持主で，決して同じことを重複させたことはない。言葉も6，7カ国語ができて各国の本を1冊読むと，その夜は夢にも幻にもその国の言葉が浮ぶというから大変な人であった。」[157)]

155）「父との散歩」前出，P.59
156）「南方熊楠百話」前出，P.381
157）「日本人の自伝⒀」前出，P.357

### (5) 外国語

鴎外，柳田，南方の海外生活には当然の事乍ら差異がある。鴎外と南方は青春の20代の海外生活である。鴎外はドイツ留学４年間，南方は米国，英国でそれぞれ６年間，８年間の計14年間の滞在である。柳田は官界のキャリアを終えた後，45歳を過ぎての滞欧であり，主としてスイスでの半年間ほどの滞在が２回あったに過ぎない。鴎外は陸軍，柳田は外務省関連（国際連盟委任統治委員会委員）で，いずれも日本を代表するように立場での外国生活であった。南方は純然たる民間人としての滞在である。鴎外はドイツ語を楽しんだ。柳田は国際機関内での公用語たる英・仏語に苦しんだ。柳田はこれら外国語を読むには晦渋は少しも感じないが，外交交渉での言葉による丁丁発止的やりとりには苦労した。[158] 南方は大英博物館で英，仏，独，伊語の稀書の抄書に励んだ。南方の場合，口頭による雑談，高等な会話など必要がなかった。

鴎外，柳田の発表の殆んどが日本語であったのに対し，南方が最初に認められた論文は英語であり，帰国後も英文発表を続けた。

南方の英文投稿は主として「ネーチャー」と「ノーツ・アンド・クイリーズ」であった。前者には計50篇，後者には計323篇掲載されている。帰国後の投稿掲載は前者が13篇，後者が304篇である。[159]

### (6) 容貌

鴎外，柳田，南方はそれぞれ独特の風格を持った容貌をしていた。必ずしも美男タイプではないが，積年の学問生活が自ずと風格化した，といったものである。自分の顔は作り上げるもの，という格言が想い出される。

芥川龍之介は「森先生」の中で鴎外を次のように描いた。

「夏目先生の御葬式の時，青山斎場の門前の天幕に，受附を勤めし事あ

158) ibid., P.391
159)「南方熊楠一切智の夢」前出，P.185
160)「鴎外百話」前出，P.303

りしが，霜降の外套に中折帽をかぶりし人，わが前に名刺をさし出したり。その人の顔の立派なる事，神彩ありとも云ふべきか。滅多に世の中にある顔ならず。名刺を見れば森林太郎とあり」[160)]

鴎外は少年時より立派な容貌だった人ではない。「ヰタ・セクスアリス」に書いているように，醜男子の劣等感を持っていたらしい。

鴎外は折にふれて「人は生れながらの顔ではいけない。自分でそれを立派なものにすべきである」といっていた。[161)]

柳田の端正な風貌は有名だ。朝日新聞の記者として名を残した荒垣秀雄と津村秀夫の柳田への印象をあげる。荒垣のは自分の入社試験に立合った柳田である。

「真ん中にいる私服姿の柳田（試験委員長）が涼やかな目でニコニコと『威あって猛からず』春風駘蕩たる温顔であるのがただ一つの救いだった」(「論説委員柳田国男」荒垣秀雄)[162)]

「ときどき四階から三階の編集室へおりてこられ，幹部と立話をしていられたが，実に温容，典雅なおもむきがあって，悠容迫らぬとはこのことだろうと，新米記者は遠くから眺めていた」「白タビの柳田国男に典型的な日本紳士を発見し，ああ実に福々しい，いい顔だと眺めていたものだ。柳田さんは新米記者に対しても実に親切だったが，その時つくづく人間の風格というものは，長い星霜と理知の光がなければできないものだと感じた」(「柳田さんの白タビ」津村秀夫)[163)]

南方は森や柳田と異なる。鋭いところがある。河東碧梧桐の表現によると，「西郷隆盛の銅像然とした大入道……大入道という直覚の外，何の感じも起こらぬ……目つきの鋭い，いわゆる炯々たる眼光…」[164)]

杉村武氏は次のように描く。

161) ibid., P.305
162) 「柳田国男伝」前出，P.671
163) ibid., P.671
164) 「南方熊楠百話」前出，PP.172-173
165) ibid., PP.207-208

「眼はらんらんとして鋭く，にらみつけられる感じである。……顔かたち全体からうける印象は日本人ばなれしていて，ビスマルクを学者くさくしたようなといったらよかろうか。しかしおのずからそなわる品格は争えぬ」[165]

### (7) その他

鴎外は酒を嗜まなかった。小壮期は少しは飲んだようだが，壮年以後は飲まなかった。

鴎外の若かりし頃，鴎外の自宅観潮楼でよく文学を話り合った佐々木信綱は，「後に酒を廃された森さんも，この頃はいささか用いられてことであった」と偲んでいる。[166]

酒席も好まなかった。鴎外の下僚であった軍医山田弘倫の「軍医森鴎外」に次のような記述がある。

「先生は読書等の為には暇をも惜しまれた故であろうか，日露戦役の連日の凱旋祝賀会には随分困って居られた。或時私を呼ばれて『君軍隊の連中は能くも暇があるものだね。我輩も種々の宴会集会には誘われるが，とても忙しくて困って仕舞ふよ，どうしたらよいのだらうか』」[167]

「宴会は貴重な時間を無意味なことに浪費するやうなことであるから，先生にとっても迷惑なことの一つでもあり，或る時は全く義理に縛られたやうな気持で，殆んど居たたまれぬほどのつらさから自然と身体の縮まる思いで居られたのかもしれない」[168]

時間が惜しいからであろうか風呂に入ることをせず，バケツの湯でもって身体を洗い拭いて身体の清潔を保っていたほどの鴎外が酒席で長時間過すことが苦痛だったことは容易に想像できる。[169]「追儺」に書かれているよ

166) 「父親としての森鴎外」前出，P.17
167) 「森鴎外私論」前出，P.267
168) ibid., P268
169) 「父親としての森鴎外」前出，PP.9-10

うに晩酌もしない。

柳田は体質的に酒は駄目だった。[170]

娘三千によると,「父もある時期にはほんのまねほどの晩酌をしていたこともあった……しかし,2本目のお燗が出て来るころには,父の方はもう酔がまわってしまう。首すじまで真赤にして…」[171]

南方の酒豪ぶりは有名だ。柳田への書信に次のようにのがある。

「今日三時ごろより子分らを集め飲み始め,小生一人で四升五合ほど飲み大酔,一度臥せしがたちまち覚め候」[172]（明治44年9月27日付）

これに対し柳田は書簡の一部に記している。

「酒は御止めとも承りおり候に,四升五合は聞きて肝ちぢみ候。御令閨の難渋拝察するところに候」[173]（明治44年10月1日付）

大酒の南方も一人息子熊弥が精神の病を発病して以来ぴったりと酒をやめている。

「現に小生大正14年より一滴の酒も飲まざるに,時として四,五升も飲むようなことを書きあり…」[174]

酒は飲み様によって薬にもなり,毒にもなる。一般的にいって帰宅後夜仕事をしようと思う人にとって,酒はやはりマイナスになる。南方のように終日自分の赴くままに仕事ができる人は別であるが……。

170)「父柳田国男を想う」前出,PP.174-175
171)「父との散歩」前出,P.113
172)「柳田国男南方熊楠往復書簡集」前出
173) ibid.,
174)「南方熊楠外伝」前出,P.153